

翻訳家への道

－ジャン・マルタンの場合－

上谷 俊則

インド布教のために1541年にリスボンを出発したイエズス会士フランシスコ・ザヴィエルはゴア、マラッカを経て1549年8月15日に鹿児島に到着します。当時、日本は応仁の乱の混乱を経て、封建諸侯の権力抗争の中から織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らが天下統一を達成しようとする前夜、政治社会は下克上の渦中にある一方、文化的には俳諧連歌、茶の湯や能、また洛中洛外図屏風のように文学、芸能、絵画等に伝統に基づきながらも現代まで生き続けている新しい芸術の発展した時代でもありました。

ザヴィエルが日本に到着したその年、9000キロ以上離れたパリでは市民が2年前に逝去したフランソワ一世の後を継いで即位したアンリ二世を正式に迎える入式を催しました。6月16日に王、18日に王妃カトリーヌがサン・ドゥニ門からシテ島にあった王宮に向かい、古代建築を模倣した装飾の施された街並みを臣下や市民の代表を従えて行進した後、中世からの伝統に倣ってパリ市民から忠誠を象徴する鍵が新たに即位した王に手渡されました。同じ時期に作られた装飾の一部を今もパリの中心部レ・アールの南にあるイノサンの泉のジャン・グージョン作の浮彫りにみることができます⁽¹⁾。その式典の構成、準備はパリ市民から委託されてジャン・マルタンという人物が詩人トマ・セビエや画家ジャン・クーザンらと協力して指揮していました⁽²⁾。

さらに中国本土の宣教を計画していたフランシスコ・ザヴィエルは1551年11月に日本を離れますが、中国大陸には上陸することなく1552年12月3日に広州沿岸の上川島でその生涯を閉じます⁽³⁾。一方、ジャン・マルタンはおそらくその翌年、1553年の夏にバストの蔓延するパリで翻訳中のアルベルティの建築論を完成することなくこの世を去ります。この二人の一見まったく無関係に思われる軌跡が実は青年期にパリで交差していました。同じ時期、1520年代の後半に、同じ場所、パリ大学教養学部で二人は学問の基礎を学んでいるのです。その後、生涯をアジアでのキリスト教布教に尽くしたフランシスコ・ザヴィエルは1622年にローマ・カトリック教会によってイグナチウス・ロヨラとともに聖人の列に加えられ、今も、特に宣教活動に携わる聖職者たちの間で敬意を集

めている一方、ジャン・マルタンは数多くの翻訳家の例に違わず、その名前は過ぎる年月とともに、また、新しい翻訳が出版されるたびに忘れ去られてきました。しかしながら、自らは作品を遺さずとも、ピエール・ドゥ・ロンサール、ジョアシャン・デュ・ベレーをはじめとするプレイヤード派の詩人たちに与えた影響、またセバスティアーン・セルリオ、ウイトゥルウィウスやレオン・バットィスタ・アルベルティなどの一連の建築論の翻訳とフォンテーヌブローやルーヴルの同時代の宮殿建築との関係が見直されるとともに⁽⁴⁾、またフランス語の擁護と顕揚を推進する時代における翻訳の重要性が再認識されるなか⁽⁵⁾、特に文学や美術史の研究者の関心が近年ジャン・マルタンにも集まるようになってきました⁽⁶⁾。

当時ヨーロッパの重要都市の一つであったパリでラテン語やイタリア語の文献をフランス語に翻訳することを通じて近代文化、芸術の基礎を築くことに貢献した一人の人物の軌跡を辿ることは、フランス語で書かれた文学を、印刷術の発明、新大陸の発見、宗教改革等の重大な変化の影響が広がりつつあった当時のヨーロッパの政治、経済、文化、宗教、科学技術の歴史の総体の中に位置づけるために決して無意味なことではないだけでなく、十九世紀以降ルネッサンスと呼ばれる古典語、古典文化の再生を目指しつつ新しい文化を創造した時代を、また特に聖書の研究、翻訳を通じて、神の意味を追求しながら人間性の尊重を模索したユマニズムと名付けられる文献研究を基礎とした活動を⁽⁷⁾、ほとんど無名の一個人の生涯を追い、業績を具体的に読み解くことによって身近な営みとして見つめていく試みでもあります。

* * *

国立古文書館に保存されている当時の公証文書によると、のちに翻訳家として活躍するジャン・マルタン⁽⁸⁾は十六世紀の初めにパリで、おそらく1507年ごろ、父ギヨーム・マルタン (Guillaume Martin) と母ギユメット・ギユマル (Guillemecte Guillemart) の間に生まれました。父ギヨームは革帯職人、母もおそらく同業者の娘で、一家は1510年にパリの政治経済の中心地であるシテ島に居を構えます⁽⁹⁾。ギヨーム・マルタンは家業にいそしみながら、徐々に資金を作り、1525年にはパリ近郊にブドウ畑を、その後小さな家と1540年には隣接する庭を購入してささやかな資産を築く一方⁽¹⁰⁾、おそらく一人息子の長男ジャンに基本的な読み書きを習得する初等教育だけではなく、パリ大学教養学部 (Faculté des Arts) に送って人文学の基礎を身につけさせ、社会的な地位を築く準備をさせたようです。

現在の中等教育機関に相当するパリ大学教養学部にはヨーロッパ各地から学生が集まり、四つのナシオン (nation 国民学生会) に組織されていました。十六世紀から十七世紀

初頭の学生に関しては三か月の学期毎の学籍登録簿（*Acta rectoria*）が紛失した数学期を除いてフランス国立図書館に保存されており⁽¹¹⁾、学生の名前と司教区による出身地を確認できます。ジャン・マルタン（Jo(h)annes Martin）という名前は1519年から1530年の間に14件記載されていますが⁽¹²⁾、その中で1522年に登録しているジャン・マルタンが唯一のパリ出身者です⁽¹³⁾。おそらく後に翻訳家として知られるようになるジャン・マルタンであると推定できますが、彼は1528年に教養学士（*inceptio* : *maîtrise ès arts*）の資格を得ています⁽¹⁴⁾。フランシスコ・ザヴィエルは1525年に登録し1529年に同じく教養学士になっていますから、その間二人はカルティエ・ラタンで出会い、場合によっては同じ教室で席を並べた可能性もあるわけです。ザヴィエルは聖バルバラ学寮（*Collège de Sainte-Barbe*）に属し、そこでイグナチウス・ロヨラに出会いますが、パリ出身のジャン・マルタンがどの学寮に通っていたかは分かっていません。実家の遠くないジャンはおそらく自宅通学生（*martinet*）だったと考えられます。

1528年、教養学部を修了した年にジャン・マルタンはガリオ・デュ・プレ⁽¹⁵⁾がその前年にフランソワ・ダシの翻訳で出版したカヴィチェオ（*Jacopo Caviceo*）の小説『ペレグリン』（*Il Peregrino - Le Pèlerin*）の改訂と欄外注の補加に携わります⁽¹⁶⁾。そのタイトル・ページから、レオナルド・ダ・ヴィンチを一時庇護し、ルイ十二世に敗れてからフランス中部のロッシュ城に幽閉され、悲運の最期をとげたロドヴィコ・スフォルツァ（イル・モーロ）の嫡子、マクシミリアン・スフォルツァに当時彼が仕えていたことがわかります。1515年にフランソワ一世に敗れてからミラノを離れ、フランス王の宮廷に従っていた元ミラノ侯爵は、幼少時をインスブルックで神聖ローマ皇帝マクシミリアンのもとで育ったこともあり、フランソワ一世のもとでは諜報活動を担っていたことが外交書簡やフランス王の公文書等から伺えます⁽¹⁷⁾。マクシミリアン・スフォルツァは1530年に亡くなりますが、その後10年間、橄文事件（1534年10月）や英国教会のローマからの訣別とヨーロッパで宗教対立の明確となる時代のジャン・マルタンの判然とした足跡は現在のところ全く知られていません。

1540年代にパリで彼と親しかったジャック・ベルティエ・デュ・マンは1550年にポワティエで出版された『フランス語正書法対談』の中で、その登場人物の一人ジャン・マルタンを次のように紹介しています。

生涯の大部分を王国の大使たちと共にイタリア、スペインとイギリスで過ごした彼は国の大事を差配する要人に仕えてきたので、人当たりの良さ、物腰の優雅さとともに確かな判断力を身

につけています。王国のいかに高貴な諸侯も彼の話喜んで耳を傾け、常に供に従わせたものです⁽¹⁸⁾。

マルタン自身は後に翻訳したウィトルウィウスの『建築論』(*De architectua – Architecture ou Art de bien bastir*)に加えた語彙解説の palme (「ナツメヤシ」, 「掌」あるいは度量衡の単位(約4インチ) palme = paume)の項目でナツメヤシについて説明し、イタリアでは実のならないナツメヤシの木がスペインでは、特に海岸沿いで実をつけているというプリニウスの博物誌にある記述を引用しますが、そこに

事実、私はどちらの国でも見たことがあるのに、若かった当時はそういうことにまだ関心がなく注意せずに見過ごしていた⁽¹⁹⁾。

と当時の回想を付け加えています。また、チェルシーにあるトマス・モアの家で生涯に最も美しい半球儀を見たとも書いていますが⁽²⁰⁾、いつ、誰とロンドンに行ったかについてはどこにも触れていません。その館の主がまだ存命だったのかも。ハンス・ホルバインは1533年にロンドンに駐在していた二人のフランス人外交官の肖像を描きました。有名な『大使たち』です。ジャン・ドゥ・ダントヴィル(Jean de Dinteville)とジョルジュ・ドゥ・セルヴ(Georges de Selve)⁽²¹⁾であることが判明している二人の人物の間には代数、幾何学、天文学、音楽(quadrivium)に関する書物や器具の雑多に並んだテーブルがおかれています⁽²²⁾、画家とそのモデルを背後に掛かる豪華なビロードのカーテンの陰から外交官の秘書として仕える若者がひっそりと窺っている姿を思いうかべることもまったく不可能とは言えないのではないのでしょうか。

ジャンの父ギヨームは1540年4月に以前から所有していたバリ近郊のブドウ畑と別荘に隣接する土地に庭を購入しますが、その直後一年も経たずに亡くなったようです。1542年3月には両親を失ったジャンは遺産の管理を父の同業者の革帯職人フィリップ・ペリシオン(Philippe Perrichon)とジャン・プブラン(Jehan Poupelin)に委託します⁽²³⁾。シテ島にあった工房の譲渡に関する同年8月の文書を読むと、工房にはすでに代理人のペリシオンが住んでいたようです⁽²⁴⁾。ジャンは父とは別の道を進っていたのです。これらの古文書には当時ジャンがロレーヌ地方の有力貴族でフランソワ一世の外交官として活動していた枢機卿ロベール・ドゥ・ルノンクール(Robert de Lenoncourt)の秘書官であったことが明記されています。遅くともその二年後に初めて彼の名前で翻訳が出版される

時から亡くなるまでの十年間、ジャン・マルタンはパリで、現在もカルティエ・ラタンと呼ばれる学問と出版の街に生き、翻訳を中心とした文筆活動に専念していたと思われる。

1544年の夏、皇帝カール五世の軍勢がシャンパーニュ地方まで侵攻しパリ市民は戦争の恐怖におびえますが、サン・ジャック通りに工房と店を構える印刷出版者ミシェル・ドゥ・ヴァスコザン⁽²⁵⁾とシテ島にある裁判所の中庭に店を構える書肆ジル・コロゼ⁽²⁶⁾は同年4月にサンナザーロ（Iacopo Sannazaro）の『アルカディア』（*Arcadia - Arcadie*）を、翌1545年6月にはピエトロ・ベンボ（Pietro Bembo）の『アゾロの談論』（*Gli Asolani - Les Azolains*）をどちらもジャン・マルタンの翻訳で出版します。

『アルカディア』は15世紀の半ばにナポリに生まれたサンナザーロが古典古代のテオクリトス、ウェルギリウスに遡る牧歌文学の伝統を俗語イタリア語で蘇らせた作品です⁽²⁷⁾。十二の散文と同数の韻文のエグログを交互に配した散韻混交文（*prosimètre*）という形式で⁽²⁸⁾、失意の中、異国ギリシアの北部アルカディア地方に迷い込んだ語り手シンチェーロ（Sincero）が羊飼いたちのユートピア的な舞台で詩歌やスポーツ、祖先への祭礼等を通じてそこに生きる個人の形成する理想的な社会の在り方と言語を模索します。羊飼いに溶け込み、一人称複数でそれらの出会いや儀礼を語る中、彼は偶然めぐり会う羊飼いの一人にナポリでの失意を著者サンナザーロの名で語ります。そして最後には川の精に導かれ幻想的な地下街道を通して生まれ故郷のナポリに帰りミュゼットに思いを託すのです。『アルカディア』はナポリ方言を基礎にしながらある意味で実験的なイタリア語でパストラル文学という新しい文学ジャンルを創造し、フィリップ・シドニー（Philippe Sidney）の同名の詩だけでなく、ニコラ・ブッサンの *Et in Arcadia ego* に見られるように、近代西欧の一つの重要な感性と主体性の基礎を形成しています⁽²⁹⁾。

『アゾロの談論』は十五世紀後半にフィレンツェでマルシリオ・フィッチーノを中心に進められたプラトンの研究、翻訳の潮流を汲み、特にフィッチーノの著した『饗宴注解』の論点に基づく対話篇です⁽³⁰⁾。愛についてのプラトンの哲学とそれをさらにキリスト教の教義に適合するように解釈しようとしたフィッチーノの思想をベンボの美しいイタリア語で祖述した作品は、サンナザーロの『アルカディア』、カスティリオーネの『宮廷人』とともに十六世紀後半のフランス抒情詩の発展にも大きな影響を及ぼしました⁽³¹⁾。

親交のあったサンナザーロとベンボの『アルカディア』と『アゾロの談論』は1500年前後に俗語イタリア語で新しい文学を作り上げるという前衛的な意図で書かれ、改訂を経て版を重ね、近代イタリア語の規範となった作品です。写本で既に読まれていた『アゾロの談論』⁽³²⁾はヴェネツィアでユマニスト出版者として知られ1499年にフラン

チェスコ・コロナの『ポリフィロの夢』(*Hyperotomachia Poliphilii*)を出版したアルド・マヌーツィオの工房から1505年に出版されます。アルドは1501年にウェルギリウスとホラティウスの作品をイタリック体で印刷した小型の八折版で出版しますが、同年、同じ体裁でペトラルカの『俗語作品集』(*Cose volgare*)を印刷します。ピエトロ・ベンボの編集によるペトラルカは体裁だけではなく、本文の校定にも古典の本文決定の際に援用されていた文献学的方法を俗語文学に適用した初めての例です。ベンボは同じ態度を踏襲して1502年にはダンテの『神曲』(*Le terze rime*)を同じくアルドから出版します。これらの十四世紀にトスカナ地方の俗語で書かれた「古典」の編集を通じてイタリア俗語の顕揚の方向性を示しつつ、自らも『アーズロの談論』の初版を1505年に出版したのです⁽³³⁾。アルドは1514年に著者の許可を得てナポリ出身のサンナザーロのイタリア語を細部で変更し『アルカディア』を出版します。その改訂にもおそらく携わり、自作の改訂も続けながら考察を深めていたベンボは1525年に『俗語論』(*Prose della vulgar lingua*)を出版し、近代イタリア語の規範を示すのです⁽³⁴⁾。マルタンは『アーズロの談論』の訳者後記で翻訳のもとにした原文は『俗語論』の5年後にベンボ自身が大幅に改訂した1530年版に基づく1540年版であることを明記しています⁽³⁵⁾。そしてマルタン自身も1545年のフランス語訳の初版出版の直後に改訂作業に取り掛かり、1547年には本の体裁や構文は初版そのままながら、語彙や綴り字を大幅に変更した改訂版を出版し、十六世紀の末まで多くの版を数えます⁽³⁶⁾。

ボローニャ出身の画家で建築家セバスティアーノ・セルリオはヴェネツィアで1537年から出版を始めた一連の建築論によって古典古代の建築を復活させる新たな様式の確立と普及に重要な役割を果たしました⁽³⁷⁾。フランソワ一世に招聘されて1541年にフランスに来ると、フォンテーヌブロー城の建築等に携わりながら1545年に『建築論』の第一巻(幾何学)と第二巻(遠近法)を⁽³⁸⁾、1547年には教会堂に関する第五巻⁽³⁹⁾を王の允許を建築家自らが得て出版します。この3巻ではイタリア語とフランス語の二か国語の本文が段落ごとに交互に印刷されていますが、そのフランス語訳をジャン・マルタンが担当しています。マルタンはまた古典古代から唯一伝わったウィトルウィウスの建築論を1547年に⁽⁴⁰⁾、そして彼の没後1553年の8月に出版される十五世紀フィレンツェの芸術家、建築家であり文学者でもあったレオン・バティスタ・アルベルティの『建築論』⁽⁴¹⁾と重要な建築論のフランス語訳を担当し、古典建築に関する知識をますます深めていきます。1546年にジャック・ケルヴェが出版する多くの建築描写を含む『ポリフィロの夢』⁽⁴²⁾のフランス語訳の草稿⁽⁴³⁾の手直し、また1549年には冒頭で紹介したアンリ二世のバリ入市式の構成演出⁽⁴⁴⁾を任されたのも彼の古典建築に関する知識と建築家、彫刻家

や画家との共同作業を認められたためでしょう。イタリア俗語文学を代表する作品の翻訳と並行してラテン語とイタリア語からの一連の建築論の翻訳という、当時フランス語では例のなかった分野をマルタンは開拓することになるのです。

1544年の春に出版された『アルカディア』を枢機卿ロベール・ドゥ・ルノンクールに献呈するにあたって出版の経緯をマルタンは次のように語っています。

昨年（1543年）の初冬に『アルカディア』の翻訳を見せるように申し付けられましたが、残念ながらその時はまだ清書ができておらず、読んでいただくことが出来ませんでした。その償いとして今ここに美しい活字で印刷して献上する次第です⁽⁴⁵⁾。

1543年の初冬、枢機卿はサンナザーロの作品を秘書マルタンが翻訳していたことを知っていました。この文章には『アルカディア』の翻訳が枢機卿の命によるものか、マルタン自身の意思で進められていたのかは言明されていません。マルタンがわずかな時間を見つけては翻訳したものを書き溜めてきたと想像することもできます。彼のアルカディアへの関心は本文の翻訳だけにとどまらず、『難解語彙名称解説』を執筆し翻訳のあとに加えていることにも表れています。カルロ・ヴェーチェが指摘したように、この『難解語彙名称解説』が原文のイタリア語版を含めて『アルカディア』に関する初めての印刷出版された注釈であることは特筆に値します。その中でマルタンは一方で登場人物を作者がどのようにとらえているか、またその背後にサンナザーロ自身や彼の知人がモデルとしてどのように表現されているかについて、おそらく彼自身の解釈を示しています。またサンナザーロの友人ポンターノのアルド版の著作集 *Opera* にスンモンテが附した注を利用して作中の地名を解説していることから彼らの作品と作者に対する深い理解が推し量られます⁽⁴⁶⁾。

イタリア俗語文学の古典を標榜する『アルカディア』と『アーズロの談論』はどちらもギリシア、ラテンの古典を普及させるためにアルド・マヌーチョが生み出した小型の八折版に優雅なイタリック体の活字で印刷した古典のための文庫本の体裁で出版されました⁽⁴⁷⁾。仏訳のヴァスコザンの活字とレイアウトも明らかにアルド版を模倣しています⁽⁴⁸⁾。しかし同じ印刷工房が同じ体裁で出版した同じ翻訳者によるこの二つの翻訳を読み較べると実は重要な違いがあることに気づきます。1545年に出版された『アーズロの談論』では前年の『アルカディア』に比べると意識の率が高く、原文と訳文の整合性もかなり低い疑いがあります。サンナザーロとベンボの間に羊飼いの牧歌と宮廷人の哲学

論議という原文の質の違い、構文や語彙の差異もあるとはいえ、訳者が翻訳に充てることのできた時間、その他の執筆条件の差が大きく影響していることも考えられます⁽⁴⁹⁾。訳者本人は1545年巻頭のシャルル・ドゥ・ヴァロワに宛てた献辞の中で「道徳哲学と神学という厳格深長な内容に満ち、多様な韻律を駆使した『アーゾロの談論』の翻訳は慣れない自分には大変な重荷であり、オルレアン公の権威ある命によって励ませられなければとても最後まで訳すことは出来なかったでしょう」⁽⁵⁰⁾と暗に厳しい条件下での仕事であったことを訴えています。しかし、一方でマルタンは前年に出版した『アルカディア』ではサンナザーロの原文の様々な韻律の実験を少し自由に訳しながらも巧みにフランス語に導入することに成功しているのです⁽⁵¹⁾。では何が起きていたのでしょうか？

1544年4月、『アルカディア』の出版を契機にマルタンの文筆活動は一気に加速します。直後に『ポリフィロの夢』の草稿の手直しを、8月にはオルレアン公シャルルから『アーゾロの談論』を依頼され、1545年6月に後者を出版。1545年8月にセルリオの『建築論』の第一巻と第二巻、1546年8月には『ポリフィロ』の出版。1547年の3月にフランソワ一世の逝去に際してピエール・ガラン（Pierre Galland）が5月7日にパリ大学でラテン語で行った追悼演説のフランス語訳、また同年セルリオの第五巻とウィトルウィウスの『建築論』と重要な作品の翻訳が矢継ぎ早に続きます。また1547年に全十巻が出版されるウィトルウィウスに関しては一種の完成見本として第一巻の献呈写本が事前に作成されています⁽⁵²⁾。その写本のジャン・グージョンの肉筆の可能性のある挿絵は1547年に出版される版画の構図とほぼ同一ですが、訳文のフランス語には細部に重要な差異があり、写本に見られる特に建築用語の誤訳は印刷本で訂正されています⁽⁵³⁾。これらの異文とグージョンのルーアンからパリへの移動時期等を考慮に入れるとこの写本は1544年頃に作成された可能性が高いのです⁽⁵⁴⁾。この写本の挿絵がグージョンによるもので本文がマルタンの翻訳だとすると、1544年がマルタンにとって如何に重要な転機であったかが改めて認識されます。おそらくこの年を境に彼の生活は大きく変わったと想像されます。

* * *

フランソワ一世の皇太后エレオノールは王逝去の直後に『ヴィオラ・アニメ』（*Viola animae*：レーモン・スポンの『自然神学』のピエール・ドルロン Pierre Dorland による簡略版）の翻訳をルイ・ペローの仲介でマルタンに依頼します。しかし、エレオノールはその直後にフランスを離れ、弟の神聖ローマ皇帝カール五世のもとに身を寄せるようになったため、マルタンはヴァスコザンが1551年に印刷した『自然神学』をルノンクール枢機卿に献呈します⁽⁵⁵⁾。その1550年7月20日付の献呈序文で、約3年前（おそらく

1547年5月から8月の間）に依頼を受けたとき、枢機卿がローマに滞在中にも関わらず、自分自身はパリにいたことを回想し、ひとえに「私が学問に専念できるように便宜を図ってください」おかげであると枢機卿の恩恵に感謝しています⁽⁵⁶⁾。

ジャック・ベルティエは『フランス語正書法対談』の舞台を丁度1547年から1548年の間に設定しています。マルタンはそこに最年長者として登場し、サン・ジャック通りのミシェル・ドゥ・ヴァスコザンの工房に住んでいる彼を慕って若い詩人、テオドール・ドゥ・ベーズ（Théodore de Bèze）、ドロン卿（Seigneur Doron）や有名なユマニスト出版者ジョス・パドの長男コンラッド・パド（Conrad Bade）たちが集まって色々な議論をしていたというのです⁽⁵⁷⁾。その傍ら印刷工房には植字工等の様々な役割を担った異なった職種の人々が活動していました。当時、著作の印刷中、著者がその校正に携わるために印刷工房に住み込むこともありました。また印刷術の発展に伴って生まれた幾つかの新しい職種の一つに校正係（correcteur）を挙げることが出来ます。大学、学寮あるいは教会からの固定収入の道を獲得していない文人たちは有力な貴族や裕福な市民家庭で個人教授（précepteur）や印刷工房で校正や索引の作成をして収入を得ながら文筆活動を続けていました。校正係は校正だけではなく、序文の執筆、或は写本の選択から原文校定までの重要な役割を果たしている場合もあり、時には編集方針の助言をすることもあったでしょう⁽⁵⁸⁾。

当時『自然神学』の依頼を受けたところのマルタンはヴァスコザンのもとで住居を供与されその翻訳に専念していたと想像できます。またそこには工房の印刷した書物も、また近くのロペール・エスティエンスの出版した辞書や文法書⁽⁵⁹⁾、ケクロ、ウェルギリウス等の古典文学やアリストテレスやプリニウスの博物誌のように百科事典のように使われた参考書の類も自由に使える環境があり、翻訳はそれらの資料を駆使して進められていました⁽⁶⁰⁾。場合によっては工房で印刷中の古典のテキストの校正や索引に目を通すこともあったかもしれません。彼が自らの翻訳に加えている欄外補注や難解語彙注解、また版による異文に関する指摘などは彼が当時の出版業での様々な作業に通曉していたことを物語っています。その一方で、工房に出入りする教師、学者、印刷業者、詩人や芸術家たちに囲まれつつ、王侯からの依頼、出版者の必要や思惑を担い、その期限を配慮しながら翻訳を仕上げていく生活を強いられていたとすると、彼にとって日々の時間の流れは大きく変わり、仕事の内容も大きく影響された可能性がないでしょうか？ その変化の端緒を実はマルタン自身が『ポリフィロの夢』の「読者へ」の序文で描いていません。

サンナザーロの『アルカディア』出版の直後にある友人がこの本の原稿をもって私に見せに来た。そこで、お願いだからこれに手を入れてくれないかというのである。もっといろいろ世話をしなければと思っている友人にするように私は承諾した。丁度その時少し暇があったので、彼の面前でもう使われていない綴り字を変えるだけでなく、イタリア語の原文を引きずっている表現を言い換えたりもしてみたが、それにしてもその原文はあまりに損なわれていたので、よくもまあその方（原稿の著者）は最後まで辿りついたものだとびっくりもした。おそらくそのため語順を変えて読み易くするほかはその方への敬意もあり彼の文書に付け足したり、削除したりは全くしなかった⁽⁶¹⁾。

今も昔も黒子とみなされることの多い訳者は、出版された翻訳書に名前が明記されないことも往々にしてあります。十六世紀のフランスも例外ではなく⁽⁶²⁾、そのためマルタンの著作目録を作成する際にいくつかの難問に直面します⁽⁶³⁾。1553年8月、マルタンの没後にジャック・ケルヴェがレオン・パティスタ・アルベルティの『建築論』を出版しますが、マルタンの死後、翻訳を完成させた友人のドゥニ・ソヴァージュ（Denis Sauvage）は巻頭のアンリ二世への献辞でマルタンの翻訳の重要性を強調しながら主な翻訳を列挙しています。

サンナザーロの『アルカディア』、ベンボの『アーゾロの談論』、『ポリフィロ』、ウイトルウィウス、『自然神学』と『オルス・アポロ』の翻訳で既にご存じのように（アルベルティの『建築論』でも）語法正しく意味を正確に伝えてくれる日常的なフランス語の他にも、今までは職人の工房で密かに使われていた数多くの（建築）用語を見出されることでしょう⁽⁶⁴⁾。

ソヴァージュはケルヴェが1543年と1553年に出版した『ホラポロン』*Orus Apollo*の翻訳を出版年は明記せずに挙げていますが、それぞれ異なったラテン語訳を原文としている二つの翻訳のうちどちらの版を、あるいはそのどちらをも、ジャン・マルタンが翻訳したのか、あるいはどちらもしなかったのかは未だ判然とは解明されていません⁽⁶⁵⁾。

ラ・クロワ・デュ・メヌスは書誌 *Le Premier volume de la Bibliotheque* の翻訳家ジャン・マルタンの項目⁽⁶⁶⁾でソヴァージュのリストにセルリオの『建築論』、『ペリグリノ』の改訂と『フランソワ一世の追悼演説』⁽⁶⁷⁾を加えた上に、マルタンの翻訳でないことが確認されているジョヴァンニ・バッティスタ・ジェリ（Giovanni Battista Gelli）の『シルセ』（Circé）⁽⁶⁸⁾とアリオスト（Ludovico Ariosto）の『狂えるオルランド』（*Orlando furioso* – *Roland furieux*）まで挙げています。特にヨーロッパの文学、美術、音楽や舞台芸術に大

きな影響を及ぼしたアリオストの翻訳は十八世紀の書誌がラ・クロワ・デュ・メヌの記述を採用してからは⁽⁶⁹⁾近年まで様々な仮説が提出されてきました。中でもマリー＝マドレーヌ・フォンテーヌは一種の翻訳工房でジャン・マルタンを含む数人が共同で翻訳したと想定しましたが⁽⁷⁰⁾、当時の翻訳の文体の比較分析や翻訳に関する基本的な態度を検討すると、その序文を執筆したジャン・デ・グット Jean Des Gouttes の翻訳である可能性が高いことが明らかになっています⁽⁷¹⁾。また、ピエール・ロモニエは1550年に出版されたロンサールの『頌歌』*Les Odes* 初版の巻末に加えられた「難解語彙解説」の著者「I.M.P.」はジャン・マルタンであると確信していますが、決定的な検証は未だされていません⁽⁷²⁾。

翻訳工房とまで組織化されなくても、十六世紀には大部の古典を数人が共同で翻訳する例も、また既存の翻訳を第三の校訂者が大幅に改定する例もありました。マルタンの場合も、『ポリフィロ』が後者の例に当たるとすると、ドゥニ・ソヴァージュが完成させたアルベルティは前者の例に相当します。しかし1547年に出版されたウイトルウィウスの翻訳に関してはマルタンの名前が表題に明記されていますし、既に引用したように彼は即位したばかりのアンリ二世への献辞や難解語彙の注解も加えていますから、『建築論』はマルタンが翻訳したと考えて問題がないように見えます⁽⁷³⁾。ところが、同時代のアベル・フーロンは1555年に出版した自著の序文で

職人たちが日常的に使う言葉を使って私が的確に翻訳したウイトルウィウスの『建築論』の初めの八巻を信用していた友人に見せたところ、彼は出版業者を通じて横領し、自分の名前で出版してしまった。そのため私は一方では名誉を、他方では私の仕事に相応しい報酬を横取りされてしまったのだ⁽⁷⁴⁾。

と非難しているのです。マルタンの名前は挙げていませんが、当時ウイトルウィウスのフランス語訳は1547年に出版されたマルタンの翻訳以外にはありませんから疑いの余地はありません。このマルタンを剽窃の罪で訴えるフーロンの非難に根拠はあるのでしょうか？

まず最初に注目には値するのは、マルタン自身がウイトルウィウスの緒言の中で、翻訳に際して役に立ったアルベルティ以来のフィランドリエ、ビュデ、セルリオやゲージョンのウイトルウィウス研究を紹介し⁽⁷⁵⁾、その他にも「不朽の榮譽を与えられるにふさわしい優秀な人たち」の協力を得て、初めて翻訳が可能となったと無名の協力者たちへ敬意を表した後、難解なウイトルウィウスとその技術用語をどのように適切なフランス語

に翻訳したかという方法論を展開しながら、

しばしばコンパスを使い、図を描いて職人たちに見せて説明し、古代建築に対応する的確なフランス語を彼らから聞き出していた。また、そのためには一回ではすぐに解決しないことも、高額報酬が必要な場合も多かった⁽⁷⁶⁾

と述懐しているのです。そこで職人たちの協力を無駄にしないためにも、ラテン語を理解できない彼らに恩返しするためにも、彼らが古代建築をフランス語で理解できるように難解語彙の説明を翻訳の本文の後に加えたというのです⁽⁷⁷⁾。ここでマルタンの示している方法論はフーロンが自らの貢献であると主張している内容と完全に一致します。フーロンはペルシウスの『風刺詩』の翻訳を1545年に出版⁽⁷⁸⁾するだけのラテン語の理解力がありましたから、おそらくマルタンの助手として協力していたと想像できます。フランソワ一世の逝去により当初期待していたヴァロワ王家からの助成金も得られず、また主な出資者だったと考えられるジャン・バルベが印刷が終わり出版にたどり着くまでに亡くなってしまったために報酬は結局支払われなかったと想像することも十分可能です⁽⁷⁹⁾。

この事情を考慮に入れて1545年に出版されたベンボの『アゾロの談論』を読むとマルタンが既にフーロンの批判を想定していたのではないかと思われる点があることに気づきます。巻頭、オルレアン公シャルルに捧げた献辞でマルタンは『アゾロの談論』のような重要な作品の翻訳にはもっと優れた導き手（conducteur）が必要だのだがと通例の謙遜な態度を示しながら、しかし翻訳はもう完成してしまったので、折角だからこの際ご厚情に与れば苦労も無駄にならない、としたたかな面も見せます。ここで一つ注目に値するのは、有益な仕事を果たすためには自分の意思ではなく、使命を託される必要があると強調していることです。

自分自身では何もできないのです。自分を奮い立たせ、導いてくれるアポロンが私には常に必要なのです⁽⁸⁰⁾。

だから世の役に立つ立派な仕事を命令して頂ければ、これからも果敢に挑戦していくと決意を表明します。そして、エジプト王プトレマイオスによってのちにアレクサンドリア図書館長に抜擢されるアリストファネス⁽⁸¹⁾の逸話をウィトルウィウスの第七巻の序文から2ページ以上にわたって引用するのですが⁽⁸²⁾、この逸話の主題は剽窃の批判とオリ

ジナル作品の賞賛にあり、ベンボの作品だけを念頭に置いてこの序文を読むと読者にはその真意が分かりかねません。一方、先に述べたようにウイトルウィウスの第一書の献呈写本が1544頃に作成されたとすると、この序文の書かれた1545年の時点でウイトルウィウスの翻訳作業は既に始まっていたと考えられます。全十巻をそれから約2年の短期間で完成させるためには、マルタン一人の作業ではなく、協力者が草稿を準備してそれをもとにマルタンが訳稿を仕上げたとしてもまったく不思議ではありません。この『アーゾロの談論』の序文を執筆しながら、マルタンはむしろ既に始まっていたウイトルウィウスの翻訳作業のことを考えていたのではないのでしょうか？

そこで、今度は1547年に出版された第七巻の序文の続きを読み進みましょう。原著の作者ウイトルウィウスは先人の功績を改めて思い起こし、彼らに謝意を表明します。

手伝ってくれた者の名前を抹消して栄誉を自らのものにしたり、他人の発想を貶めて自分を必要以上に称揚したりはしません。工夫して築いた豊かな経験を代々後世に伝えるためにその構想を記すことに携わった全ての書き手に遍く感謝するのです⁽⁸³⁾。

自らの建築論の執筆を、先人の豊かな泉に水を汲み、それを自分の必要に応じて活用することによって肥沃な言葉や考えが生まれるのだと譬えた後、参考にした主にギリシアの建築家、数学者や哲学者を数十人にわたって列挙します。それはフランス語訳の緒言でマルタンが参考にした先人や同時代の建築家、また無名の「不朽の栄誉を与えられるにふさわしい優秀な人たち」に感謝する行為と見事に一致します。誰が、誰のために、何を、如何に理解し、如何に翻訳するのかという問題に真剣に向き合い、一つの指針を打ち立てて翻訳に関する省察を深めようとしていたマルタンはウイトルウィウスの翻訳計画が始まったころ、即ち『アーゾロの談論』を出版したころ、印刷工房で新しい現実に直面していたはずで、将来自分の名前で翻訳が出版される時も、ウイトルウィウスが『建築論』で示した先人や協力者への謝意と敬意を自らのものとすることによって、全十巻の翻訳をフランス語の擁護と顕揚というより大きな文化政策の一部に位置づけ⁽⁸⁴⁾、無名の協力者とともに貢献した自らを«conducteur»と定義し、正当化しようとしていたと理解できないでしょうか？またフーロンがその文化政策の重要性をよく理解していたことは彼が同じ時期に翻訳したベルシウスの『諷刺詩』の序文に読み取ることができます。しかし、おそらく重要であるがゆえにフーロンは自分の名誉と報酬に拘ったようです⁽⁸⁵⁾。

マルタンは1544年の『アルカディア』出版以来、一方で有力な貴族の意向に応じて個人で翻訳を進める傍ら、印刷工房に於いては共同作業としての翻訳作業を統括し、決定

稿を提出する「conducteur」としての責任を果たしていたと推測されます。それは当時の画家や彫刻家のような芸術家の工房と同じような形で翻訳工房が存在したというのではなく、作品の内容や、出版計画の必要性から時と場合に応じて様々な作業形態があり、才能や社会環境の異なった人たちが出版業界の必要に応じた翻訳を供給するようになっていたということでしょう。アマデイス・ドゥ・ゴール (Amadis de Gaule) の翻訳者、ニコラ・エルブレ＝デ＝ゼサル (Nicolas Herberay Des Essars) は砲兵部隊を率いる砲術主任 (Commissaire de l'artillerie) でした。本人も述懐しているように、以前に暮らしたことのあるスペインの文物のフランス語への翻訳は任務のない平時の手慰みとして始めたものです。その文章が目敏い出版者に注目され、アマデイス・ドゥ・ゴールは1540年に出版された第一の書から空前の成功をおさめ彼の翻訳はフランス語散文の鑑と仰がれ、人気訳者は出版者から厚遇されるようになります⁽⁸⁶⁾。しかし、彼はその収入に頼るわけではなく、砲術主任の任務を続けます。そして自らの意思で出版者との契約を打ち切ります⁽⁸⁷⁾。商人の家に生まれたジャック・アミヨ (Jacques Amyot) はジョルジュ・ドゥ・セルヴの死後、その後任としてギリシア語からの翻訳の才能を認められ、代々の王から庇護され聖職を得て司教にまでなり、また側近として寵愛されながら大部のプルタルコス⁽⁸⁸⁾の翻訳に当たります。個々の英雄伝の写本が1540年代前半にフランソワ一世に献呈されてからヴァスコザンが1559年に完訳初版を出版するまでに15年以上の歳月が流れていることは特筆に値します。しかし一方で十六世紀の後半には翻訳によって生計を立てる人々が生まれてきます⁽⁸⁹⁾。フランソワ・ドゥ・ベルフォレ (François de Belleforest) やガブリエル・シャピュイ (Gabriel Chappuys) といった生涯に百冊に近い翻訳を出版者の要求に応じて次々に出版する人物が登場したとき、歴史上初めてフランスに職業としての翻訳家が存在するようになったといえるでしょう⁽⁹⁰⁾。

* * *

また1540年代のサン・ジャック通りではウイトルウィウスの本文の翻訳と図版の作成に限らず工房の垣根を超えた共同作業が存在しました。ウイトルウィウスの建築用語に関するフランス語訳の異文がその経緯を明らかにしてくれます。実は、先に指摘した献呈写本の技術用語の誤訳は当時の辞書の誤った訳語に由来する場合があります。写本の誤訳は単に翻訳者の使った辞書が間違っていたか、不十分だったからなのです。しかし、その誤りが1547年に全十巻が出版された際に訂正され、的確なフランス語の用語が使われている場合があります。ウイトルウィウスが数か所使っているギリシア語源の「epistylum」⁽⁹¹⁾ (軒桁) という言葉は献呈写本では「les Epistiles, c'estadire chapiteaux」⁽⁹²⁾ と同義語を反復して翻訳されていますが、実はこの文脈では不適切な訳語「chapeau(x)」

（柱頭）は当時のエステイエンスの羅仏辞典の最新版（1544年）の記述に一致します⁽⁹³⁾。しかし印刷された本文では「les epistyles, c'est-à-dire architraves」⁽⁹⁴⁾と現在も使われている建築用語「architrave」（アーキトリーブ、軒桁）に訂正されており、さらにマルタンは「難解語彙注解」に次の二項目を加えて説明しています。

アーキトリーブ（Architrave）は階上に上層階を続けるために置かれる石あるいは木の水平材（sommier）、軒桁である。

エピステイリウム（epistyles）はAの項目で既に説明したアーキトリーブ（Architraves）のことである⁽⁹⁵⁾。

この訂正がマルタン自身の調査によるのかフーロンの協力の成果なのかは分かりません⁽⁹⁶⁾。ただ、一度誤って訳された技術用語が、二年後に正しく翻訳された事実には違いはありません。しかし、それだけではありません。この訂正はウールドリッジが指摘するようにロベール・エステイエンスの1549年に出版した仏羅、1552年の羅仏辞典にいち早く取り入れられているのです⁽⁹⁷⁾。この小さな訳語訂正の例は、剽窃、盗作といった個人の利害関係を超えて、1540年代フランスの大きな課題である俗語の顕揚に建築家、職人、翻訳者、印刷工房の複数の人物の貢献、協力があったことを端的に物語っています。ロンサルも詩作に職人の使う言葉を積極的に取り入れることを勧めているではありませんか⁽⁹⁸⁾。

ちなみにマルタンは1547-1548年頃から自らの蔵書に「Jan Martin de Paris, studieux d'Architecture」と署名しています⁽⁹⁹⁾。そこでウィトルウィウスによる建築術（*architectura*）の定義をマルタンの翻訳で読んでみましょう。

建築術とは多くの学問と様々な知識に支えられた科学技術であり、その基準に従って職人たちの作り上げる造営物は遍く吟味される。また、その術は造作と言説から生まれるが、ここでいう言説とは工匠たちが時に共に伝える議論と伝承である⁽¹⁰⁰⁾。

ここではクロード・ペローが一世紀後に実践（Pratique）と理論（Théorie）と訳す⁽¹⁰¹⁾原文の*fabrica*と*rationicinatio*をマルタンは造作（fabrique）と言説（discours）と訳していますが⁽¹⁰²⁾、言説（discours）に続く「工匠たちが時にお互いに伝えあう議論と伝承」「ou communication que les ouvriers ont aucunesfois ensemble」という説明は原著の本文にも献呈写本の訳文にもありません。明らかに訳者マルタンの加筆です。ラテン語の本文にここ

で「communication」が示すような口頭での議論や伝承を明確に意味する言葉は見当たりません。原文では建築家の理論的省察であった行為がフランス語では職人とその棟梁を交えた技術の口頭での検証と伝承に変更されています。ギリシア語源の言葉を多用し、あえて簡明な文章を好んだウィトルウィウスの本文⁽¹⁰³⁾をマルタンは平易な言葉で言い換え（「ParaPhraser」）⁽¹⁰⁴⁾、この定義以外にも原文にはない現場での口頭伝承の文脈を加えて翻訳は一種時代錯誤的な現実効果を生み出しています⁽¹⁰⁵⁾。忠実に原著を尊重することを主張しながら、実は著者ウィトルウィウスの根本的な執筆意図を裏切っていると解釈することも可能です。しかし、それは皮革と金属の加工に長けた革帯職人の家に生まれたジャン・マルタンが自らの教養とフランス語を論理的に構築する力を生かし、画家、彫刻家、建築家やほかの文人たちとの共同作業を率いる「conducteur」として古典古代から伝えられたウィトルウィウスの本文に当時のフランスの職人の言葉で息を吹き込み、近代建築の基礎を作り上げることに貢献することでもあったのです。崩れ果て形のほとんど想像できなくなった廃墟にその時代に生きた人間のペンとコンパスの力で新たな生命の表現としての古典様式を生み出していく行為はルネッサンスとユマニスムの重要な側面の一つではないでしょうか⁽¹⁰⁶⁾？

* * *

訳者がふと個人的な感想をもちます。ジャン・マルタンはウィトルウィウスの翻訳に附した「固有名詞、難解語彙注解」の中で、ウィルトゥス（*virtus lat. – vertu it. – vertu fr.*）という言葉が当時のラテン語の辞書からホラティウス、アリストテレスやセネカの定義を紹介した後、「しかし聖アウグスティヌスは『神の国』の第四書で古の人は徳（ウィルトゥス）とは正しく、そして幸福に生きる術であると定義し女神とてあがめると証言しているが、聖アウグスティヌス自身は神の恵み以外の何物でもないと主張している」という辞書の記述に沿って⁽¹⁰⁷⁾説明します。「そして他の誰よりも彼を信じなければならない⁽¹⁰⁸⁾」という言葉でその項目を閉じるのです。しかしこの最後の文章（「et de ce le fault croire par dessus tous les autres」）は辞書には見当たりません⁽¹⁰⁹⁾。ここでマルタンは聖アウグスティヌス⁽¹¹⁰⁾を引用することによって神の恵み、恩寵に関する自らの考えを強調しようとしているのでしょうか？ルターやカルヴァンがローマ・カトリック教会のあり方に根本的な疑問を提出した宗教改革の渦中にあった当時、この証言は一つの態度表明と受け止められるのでしょうか？折しもミシェル・ドゥ・ヴァスコザンの工房に集っていた若者たちの中にはテオドール・ドゥ・ペーズやドゥニ・ソヴァージュのようにアンリ二世の治世下に厳しくなった宗教弾圧を避けるためにパリを離れジュネーヴに逃れたものもいます⁽¹¹¹⁾。また、マルタンを庇護したオルレアン公シャルル

やマルグリット・ドゥ・ナヴァールは福音主義者たちを庇護したことでも知られています。しかし、ここでもう一つ注意しなければならないのは、マルタンが聖アウグスティヌスから引用しているという古代からのウィルトゥスの定義を「正しく、そして幸福に生きる術」《art de bien et heureusement vivre》と翻訳している点です。カルピヌスの引用する定義《ars bene recteque uiuendi》は《art de bien et droitement vivre》「正しく、そして真っ当に生きる術」と訳すことができます。一方、マルタンの《art de bien et heureusement vivre》は《ars bene beateque uiuendi》をフランス語に訳したと考えるのが自然でしょう。実はこの《bene beateque》「正しく、そして幸福に」という表現はキケロが『パラドックス』の中で使っている定義にむしろぴったり一致するのです⁽¹¹²⁾。マルタンは辞書の説明を翻訳しながら、聖アウグスティヌスの言葉を当時一般的に広く行き渡っていた《ars bene beateque uiuendi》というキケロの言葉に⁽¹¹³⁾ 知らずに置き換えていたと考えることが出来ないでしょうか？もしそうだとすると、マルタンの哲学に関する素養や宗教観を正確に位置づけるためには今一度ドルランドウスの『自然神学』やベンボの『アープロの談義』の翻訳の細部を詳細に検証したうえで総合的に評価していく必要があるでしょう⁽¹¹⁴⁾。

1560年の初版から17世紀の初頭まで執筆を続けた『フランス探求』でエティエンヌ・パスキエは当時までのフランス文学の歴史を素描する中で、1540年代に多く出版されるようになった翻訳作品を育苗園の苗木に例え「そこに接ぎ木されて数多くの偉大な詩人が育ち、アンリ二世の時代にフランス語の詩歌が花を開かせた」と描いています⁽¹¹⁵⁾。その新世代を代表する詩人ロンサールは1550年に処女詩集でマルタンに「頌歌」を献じます。

作品は考案者のもの、
それを学ぶ者は
彼に感謝しなければ
嘘つきとみなされる。
良く学んだ筆は
天まで飛翔し、
その麗しい企ては
条件に左右されない⁽¹¹⁶⁾。

そして三年後には訳者の没後に出版されたアルベルティの『建築論』の巻頭に「墓碑」

を捧げるのです⁽¹¹⁷⁾。アントワヌ・デュヴェルディエはラ・クロワ・デュ・メースに僅かに遅れ自らの俗語書誌を1585年にリヨンで出版しますが、そのジャン・マルタンの項目では2頁半にわたって『アゾーロの談論』の翻訳を引用します⁽¹¹⁸⁾。プロテスタントと旧教同盟 (la Ligue) の対立がフランスで激化する一方、ローマでは同年三月に巡察師ヴァリニャーノに率いられて三年前に長崎を出発した天正遣欧使節が教皇に謁見します。しかし、彼らが帰り着くころ日本では既に秀吉によるキリスト教徒の弾圧が始まっていました。十七世紀になると、ウィトルウィウスを新たに翻訳したクロード・ペローがマルタンの翻訳を厳しく批判しますが、古典主義の世紀に生きたロンサルの最後の崇拜者ギヨーム・コルテは『フランス詩人伝』に彼の評伝 (Vie) を収録し「古今にわたる異国語の著作をフランス語で読者に提供するために果敢に挑戦した先駆者の一人」の業績を讃え、忘却の淵から救い現在に伝えています⁽¹¹⁹⁾。

(国立科学研究機構 ルネッサンス高等研究所、トゥール)

注

- (1) 彫刻家ジャン・グージョーンと当時の美術と文学の関係については Pierre du Colombier, *Jean Goujon*, Paris, Albin Michel, 1949 と Henri Zerner, *L'Art de la Renaissance en France : L'invention du classicisme*, Paris, Flammarion, 1996 を参照。
- (2) 式典に先立ってジル・コロゼとミシェル・ドゥ・ヴァスコザンが出版したロンサール (Pierre de Ronsard, « Avantentrée du Roi Treschrestien à Paris », dans *Œuvres complètes*, éd. P. Laumonier, t. I, Paris, Marcel Didier, 1973, p. 17-23) とデュ・ベレー (Joachim Du Bellay, « Prophonématique au Roy Treschrestien Henry II », dans *Œuvres poétiques*, éd. H. Chamard, t. III, Paris, Société nouvelle de librairie et d'édition ; Édouard Cornély, 1912, p. 61-74) の小冊子に関しては、ミシェル・マニアンの後掲論文 (注 25) p. 155-156 を参照。1549 年にはデュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』と『オリヴ』も出版されている。
- (3) Saint François Xavier, *Correspondance 1535-1552 : Lettres et documents. Traduction intégrale, présentation, notes et index de Hugues Didier*, Paris, Desclée de Brouwer ; Bellarmin, 1987, p. 35 ; 浅見雅一、『フランシスコ＝ザビエル：東方布教に身をささげた宣教師』、山川出版社、2011 年を参照。
- (4) André Chastel et Jean Guillaume (dir.), *Les traités d'architecture de la Renaissance*, Paris, Picard, 1981 ; André Chastel, *Culture et demeures en France au XVI^e siècle*, Paris, Julliard, 1989 ; Jean Guillaume, « Jean Goujon à Ecoeu : Science vitruvienne et invention française au temps de Jean Martin », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999 (後掲注 6), p. 7-12 ; 高田勇、「ロンサールとフォンテーヌブロー」、『ロンサール研究』, XXIV (2011), p. 1-42 を参照。
- (5) Ferdinand Brunot, *Histoire de la langue française des origines à nos jours. Tome II : Le XVI^e siècle, Bibliographie et notes complémentaires établies par Hélène Naïs*, Paris, Armand Colin, 1967 ; Michel Magnien, « Le français et la latinité : De l'émergence à l'illustration (XV^e-XVI^e siècles) », dans Frank Lestringant et Michel Zink (dir.), *Histoire de la France littéraire. Naissances, Renaissances : Moyen Âge – XVI^e siècle*, Paris, Presses Universitaires de France, 2006, p. 36-77 ; Marie-Luce Demonet, « L'espace linguistique européen : La Renaissance », *ibid.*, p. 96-150 ; Véronique Duché (dir.), *Histoire des traductions en langue française. XVI^e et XVII^e siècles, 1470-1610*, Paris, Verdier, 2015 を参照。
- (6) Pierre Marcel, *Les influences italiennes sur la Renaissance artistique française. Un vulgarisateur : Jean Martin*, Paris, Garnier, 1899 ; 2^e édition : Paris, Félix Alcan, 1927 (ジャン・マルタンのイタリア文化の紹介者としての役割を強調) ; Michèle A. Lorgnet, *Jan Martin translateur d'emprise : Réflexion sur les constructions de textes à la Renaissance*, Bologna, Cooperativa Libreria Universitaria Editrice Bologna, 1994 (言語学的見地からのマルタンの翻訳の分析の試み)。近年の研究はマリ＝マドレーヌ・フォンテーヌが 1988 年に発表した論文に多くを負う : Marie Madeleine Fontaine, « Jean Martin,

- traducteur » dans *Prose et prosateurs de la Renaissance*. Mélanges offerts à Robert Aulotte, Paris, SEDES, 1988. p. 109-122. ソルボンヌ大学で催されたシンポジウムはその時点での研究成果を総括 : Jean Martin, *Un traducteur au temps de François I^{er} et de Henri II* (colloque organisé par Marie Madeleine Fontaine), Paris, Presses de l'École Normale Supérieure, 1999 (*Cahiers V.L. Saulnier*, n° 16、以下 Jean Martin, *Un traducteur...*, 1999 と略記)。J.-P. de Beaumarchais, Daniel Couty, Alain Rey (dir.), *Dictionnaire des littératures de langue française*, Paris, Bordas, 1984, p. 1428 (notice par M. M. Fontaine).
- (7) Augustin Renaudet, *Préréforme et humanisme à Paris pendant les premières guerres d'Italie (1494-1517)*. Deuxième édition, revue et corrigée, Paris, Librairie d'Argences, 1953 ; « humanisme », dans Georges Grente (dir.), *Dictionnaire des Lettres française, XVI^e siècle*, Paris, Fayard, 1951, p. 383-386 (2^e éd., 2001, p. 610-613) ; Jean Céard, « Humanisme », dans *Dictionnaire des littératures de langue française*, éd. cit., p. 1070-1075 ; Silvana Seidel Menchi, « Présentation » de Augustin Renaudet, *Érasme et l'Italie*, Genève, Droz, 1998, p. IX-XVI ; André Chastel et Robert Klein, *L'Humanisme : L'Europe de la Renaissance*, Genève, Skira, 1995 (1^{re} éd. 1963) ; 渡辺一夫、『フランス・ユマニズムの成立』、東京、岩波書店、1976年を参照。
- (8) « Il y a plus d'un âne qui s'appelle Martin. » と諺にも言われるように、マルタンは名前としても苗字としてもフランスで最も多く使われている人名である。ジャンも最も普及している名前の一つなので、この二つを組み合わせたジャン・マルタンには当時も今も非常に多くの同姓同名の人物が存在する。16世紀だけでも100件を超えたジャン・マルタンを記載した文献の一人一人の出身地、職業、交友関係や活動を確認しながら混同を避ける必要がある。Jean Martin, *un traducteur...*, p. 251-255 ; Toshinori Uetani, *Étude prosopographique sur Jean Martin : Un traducteur de la première Renaissance française*, Thèse de doctorat présentée sous la direction du professeur † Michel Simonin à l'Université de Tours, 2001 (以下 T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001 と略記), p. 318-323 を参照。ラ・クロワ・デュ・メーヌとデュ・ヴェルディエはそれぞれパリとリヨンで出版したフランス語文献の書誌 (*Le Premier volume de la Bibliotheque*, Paris, Abel L'Angelier, 1584, p. 242-243 ; Antoine Du Verdier, *La Bibliotheque d'Antoine Du Verdier, Seigneur de Vauprivas*, Lyon, Barthélemy Honorat, 1585, p. 719-723) で異なったジャン・マルタンに4項目を充てている。*Dictionnaire des Lettres françaises, XVI^e siècle* の初版 (Paris, Fayard, 1951) では一つの項目の中に三人の異なったジャン・マルタンに関する情報が混同されていたが、ミシェル・シモナンが監修した改訂版ではラ・クロワ・デュ・メーヌとデュ・ヴェルディエで扱われている四人のうち二人のジャン・マルタンについて独立した項目が充てられている (Paris, Fayard-Livre de poche, 2001, p. 811-813)。
- (9) Archives nationales (AN), Minutier central (MC), Étude VIII, 11, le 3 mars 1510 (n. s.) ; Jean Dupèbe et Toshinori Uetani, « Documents sur Jean Martin et sa famille », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, p. 245.

- (10) AN, Y 87, f. 169v ; *ibid.*, p. 246.
- (11) Bibliothèque nationale de France (BnF), Ms. Lat., 9951-9954. Gallica でデジタル化。この資料に関しては Jean Dupêbe, « Autour du Collège de Presle : Testaments de Ramus, Talon et Péna », *BHR*, XLII (1980), p. 123-137, 特に p. 126-127 を参照。
- (12) T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001, p. 27.
- (13) BnF, Ms. Lat., 9951, f. 48 r° b (1522); T. Uetani, « Éléments biographiques sur Jean Martin », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 14.
- (14) BnF, Ms. Lat. 9952, f. 34 r° b (1527-28); *ibid.*, p. 14-15.
- (15) ノートル・ダム橋とシテ島のバレにあったガリオ・デュ・プレの工房と店を往復する通り道 (Rue de la vieille Pelleterie, à l'enseigne Saint Jacques) にマルタン家の工房は位置していた (前掲注9 参照)。ガリオ・デュ・プレに関しては Annie Charon-Parent, *Les Métiers du livre à Paris au XVI^e siècle (1535-1560)*, Genève, Droz ; Paris, Minard et Champion, 1974, p. 217-251 ; « Aspects de la politique éditoriale de Galliot Du Pré », dans Pierre Aquilon et Henri-Jean Martin (dir.), *Le Livre dans l'Europe de la Renaissance*, Paris, Promodis, 1988, p. 209-218 ; Arthur Tilley, *Studies in the French Renaissance*, Cambridge, Cambridge University Press, 1922, p. 168-218 を参照。
- (16) Gustave Reynier, *Le Roman sentimental avant l'Astrée*, Paris, Armand Colin, 1908 (rééd. : 1971), p. 49-52 ; William Kemp, « A Complex Case of Privilege infringement in France: The History of the Early Editions of Caviceo's *Peregrin* 1527-1529 », *Bulletin du bibliophile* (1992-1), p. 41-62 ; Mireille Huchon, « Jean Martin expositeur : à partir des marginales du *Peregrin* de Caiceo », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 135-152.
- (17) T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001, p. 33-38 を参照。
- (18) Jacques Peletier du Mans, *Dialogue de l'Ortografie e Prononciation Françoese*, Poitiers, Jan et Enguilbert de Marnef, 1550 : « C'ët un homme qui à etè la plus part de son âge avec les ambaßadeurs de France an Italie, an Espagne e an Angleterre : qui à etè domestique des personnages qui ont ù les afferes an animât. Au moyen de quoe il à acquis tele usance, tel antreg'ant, tele grace e jugemant, que les Signeurs du Royaume pour grand qu'iz soët, ont grand plesir et contentemât de l'ouir parler e de l'avoër an leur compagnie » (p. 47-48). 引用文は正書法の改革を唱えるジャック・ペルティエ・デュ・マンの特殊な活字を使った独自の綴り字で印刷された原文を現在フランス語の常用活字でその特殊性をほんの少し残すような表記を、本文中の日本語は厳密な翻訳ではなく文脈にそって理解しやすいような意識を試みた。他の引用文では原文に沿った句読点と綴り字を用いながら、必要に応じてアポストロフを加え、ij, u/v を現代語法に従って使い分けた。
- (19) *Architecture ou Art de bien bastir, de Marc Vitruve Pollion Autheur Romain antique : Mis de Latin en Francoys, par Jan Martin Secretaire de Monseigneur le Cardinal de Lenoncourt. Pour le Roy Treschrestien Henry II*, Paris, Jacques Gazeau pour les héritiers de Jan Barbé, 1547 (in-Fol.) : « a la verité j'en ay veu en l'un et en l'autre pays : mais je n'y pris oncques de si pres garde, a l'occasion de ma jeunesse, qui ne s'adonnoit encores a teles choses »

- (« Declaration des noms propres, et motz difficiles contenuz en Vitruve », f. C1v). Cf. Plinius Secundus, *Historia mundi denuo emendata*, XIII, 4 (Basileae, Froben, 1535, p. 231).
- (20) *Ibid.*, « Declaration des noms propres, et motz difficiles contenuz en Vitruve », f. B3 (« Hemiisphere »).
- (21) 1541年に早逝したジョルジュ・ドゥ・セルヴの生前に翻訳したプルタルコス『八列伝』は1543年にミシェル・ドゥ・ヴァスコザンが出版した：*En ce present volume sont contenues les vyes de huict excellens & renommez personnaiges Grecz & Romains, mises au parangon l'une de l'autre : escriptes premierement en langue Grecque par le tresveritable Historien & grave Philosophe Plutarque de Cherronnee, & depuis translatees en francoys, par le commandement du treschrestien Roy Francoys premier de ce nom, par feu reverend pere en Dieu messire George de Selve, en son vivant Evesque de la Vaur*, Paris, Michel de Vascosan, 1543. ジョルジュ・ドゥ・セルヴとジャック・アミヨのプリユタルクの翻訳の関係についてはRené Sturel, *Jacques Amyot : Traducteur des Vies parallèles de Plutarque*, Paris, 1908 (Genève, Slatkine, 1974), p. 12-13 ; 179-181を参照。因みにジョルジュ・ドゥ・セルヴも1522年にパリ大学教養学部に登録している (BnF, Ms. Lat. 9952, f. 39^r b ; T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001, p. 29 et n. 57)。
- (22) Oskar Bätschmann et Pascal Griener, *Hans Holbein*, traduit de l'anglais par Ann Sautier-Greening et Béatrice de Brimont, Paris, Gallimard, 1997, p. 183-184, 188.
- (23) AN, MC, Ét. CXXII, 174, le 20 mars 1541 (n. st.) ; J. Dupêbe et T. Uetani, art. cit., dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 246-247.
- (24) AN, MC, Ét. XXXIII, 18, le 24 août 1542 ; Ernest Coyecques, *Recueil d'actes notariés relatifs à l'histoire de Paris et de ses environs au XVI^e siècle*, Paris, Imprimerie nationale, t. I, 1905, n° 1887 ; J. Dupêbe et T. Uetani, art. cit., p. 247-248.
- (25) Michel Magnien, « Des presses humanistes au service du vernaculaire ? Le cas Vascosan (vers 1500-1577) », dans Christine Bénévent, Annie Charon, Isabelle Diu et Magali Vène (éd.), *Passeurs de textes : Imprimeurs et libraires à l'âge de l'humanisme*, Paris, École des chartes, 2012, p. 133-165 ; Isabelle Pantin, « Le style typographique des ouvrages scientifiques imprimés par Michel de Vascosan », *ibid.*, p. 167-184を参照。
- (26) Magali Vène, « « Pour ce qu'un bien caché [...] ne peult profiter à personne ». « J'ay prins d'aultruy la pierre et le ciment » : Gilles Corrozet, auteur et libraire, passeur de textes », *ibid.*, p. 199-213を参照。
- (27) *L'Arcadie de messire Jaques Sannazar, gentilhomme Napolitain excellent Poete entre les modernes, mise d'Italien en Francoys par Jehan Martin Secretaire de Monseigneur Reverendissime Cardinal de Lenoncourt*. Avec Privilege. Ce livre a esté imprimé à Paris par Michel de Vascosan, demeurant en la rue saint Jaques a l'enseigne de la Fontaine, pour luy, et Gilles Corrozet libraire tenant sa boutique en la grand salle du Palais, pres la chambre de consultations. M. D. XLIII. – In-8°. ジャン＝クロード・テルノー Jean-Claude Ternaux 編集のマルタン訳の現代版 : Reims, Presses universitaires de Reims, 2003. ジェラルール・

- マリノの現代フランス語訳とフランチェスコ・エルスパメールの編集によるイタリア語原文との対訳版：Iacopo Sannazaro, *Arcadia – L'Arcadie, Édition critique par Francesco Erspamer. Introduction, traduction, notes et tables par Gérard Marino avec une préface d'Yves Bonnefoy*, Paris, Les Belles Lettres, 2004.
- (28) Nathalie Dauvois, *De la Satura à la Bergerie : Le prosimètre pastoral en France à la Renaissance et ses modèles*, Paris, Honoré Champion, 1998 ; 林千宏、「レミ・ペローにおける牧歌の詩学 — 「牧歌」(1555)を中心に—」、『ロンサール研究』, XXXI (2018), p. 77-98 を参照。
- (29) Françoise Lavocat, « Les traductions françaises de l'*Arcadia* de Sannazar », *Revue de littérature comparée*, 275, 69^e année, n° 3 (1995), p. 323-339 ; Nathalie Dauvois, *op. cit.*, p. 143-151 ; Erwin Pnanofsky, « « *Et in Arcadia ego* » : Poussin et la tradition élégiaque », dans *L'œuvre d'art et ses significations : Essai sur les « arts visuels »*, Traduction par Marthe et Bernard Teyssède, Paris, Gallimard, 1969, p. 278-302 et illustrations ; Carlo Vecce, « Émergence du sujet dans le paysage bucolique (Sannazar et Théocrite) », dans Dominique de Courcelles (éd.), *Nature et paysages : L'émergence d'une nouvelle subjectivité à la Renaissance*, Paris, École des chartes, 2006, p. 77-93 を参照。
- (30) *Les Azolains de monseigneur Bembo, De la nature d'Amour*. Traductizt d'Italien en Francoys par Jehan Martin, Secretaire de monseigneur Reverendissime Cardinal de Lenoncourt, par le commandement de Monseigneur, Monseigneur le duc d'Orleans. M. D. XLV. Imprimé a Paris par Michel de Vascosan, pour luy, et pour Gilles Corrozet libraires. Avec privilege. – In-8°. イタリア語原文と現代フランス語訳との対訳版：Pietro Bembo, *Les Azolains – Gli Azolani : Édition bilingue. Traduction et présentation de Marie-Françoise Piéjus ; Préface de Mario Pozzi ; Texte italien et notes par Carlo Dionisotti*, Paris, Les Belles Lettres, 2006.
- (31) A.-J. Festugière, *La philosophie de l'amour de Marsile Ficin et son influence sur la littérature française au XVI^e siècle*, Second tirage, Paris, J. Vrin, 1980 ; André Gendre, « La Pléiade entre Bembo et l'Arioste », *Italique*, VI (2003), p. 7-36 を参照。
- (32) Pietro Bembo, *Gli Asolani, edizione critica a cura di Girogio Dilemmi*, Firenze, Presso l'Accademia della Crusca, 1991.
- (33) Martin Lowry, *Le Monde d'Alde Manuce : Imprimeurs, hommes d'affaires et intellectuels dans la Venise de la Renaissance*, Traduit de l'anglais par Sheila Mooney et François Dupuigrenet Desroussilles, Paris, Promodis – éditions du Cercle de la librairie, 1989, p. 156-157 et p. 232-236 ; Mario Pozzi, « Nota introduttiva », dans *Trattatisti del Cinquecento*, Milano-Napoli, Riccardo Ricciardi, 1996, Tomo 1, p. 7-12.
- (34) ベンボの『俗語論』の16世紀フランスでの受容に関しては Nicole Bingen, « Sources et filiation de la « Grammaire italienne » de Jean-Pierre de Mesmes », *BHR*, t. 46 (1984), p. 633-638 ; *Le Maître italien (1510-1660) : Bibliographie des ouvrages d'enseignement de la langue italienne destinés au public de langue française, suivie d'un Répertoire des ouvrages bilingues imprimés dans les pays de langue française*, Bruxelles, Émile Van

- Balberghe, 1987 ; 伊藤玄吾, 「ベンボの『俗語論』の16世紀中期フランスにおける受容に関する一考察 — ジャン＝ピエール・ド・メムの『イタリア語文法』を中心に」, 『天野恵先生退職記念論文集』, 京都大学文学部イタリア語イタリア文学研究室, 2018, p. 67-83 を参照。
- (35) *Les Azolains de monseigneur Bembo*, éd. cit., f. 155.
- (36) 前掲 (注 31) 伊仏対訳版, M.-F. Piéjus, « Les Azolains en France au XVI^e siècle », dans *Les Azolains – Gli Asolani*, éd. cit. p. LXI-LXXIX を参照。
- (37) セルリオに関しては Sabine Fromel ; Yves Pauwels (trad.), *Sebastiano Serlio : Architecte de la Renaissance*, Paris, Gallimard, 1996 ; Sylvie Deswartes-Rosa (dir.), *Sebastiano Serlio à Lyon : Traité d'architecture de Sebastiano Serlio : une grande entreprise éditoriale au XVI^e siècle*, Lyon, Mémoire Active, 2004 (S. Deswartes-Rosa, *op. cit.*, 2004 と略記) を参照。
- (38) *Il primo [-secondo] libro d'Architettura di Sabastiano Serlio, Bolognese. Le premier [-second] livre d'Archtitecture de Sebastian Serlio, Bolognais, mis en langue Francoise, par Jehan Martin, Secetaire de monseigneur le Reverendissime Cardinal de Lenoncourt*, Paris, Jean Barbé, 1545. – In-Fol. 第一、第二巻に関しては *Imprimeurs et libraires parisiens du XVI^e siècle. Ouvrage publié d'après les manuscrits de Philippe Renouard par la Bibliothèque nationale, (Imprimeurs et libraires parisiens du XVI^e siècle* と略記) Tome 3, Paris, Service des travaux historiques de la ville de Paris, 1979, n° 49 ; Magali Vène, *Bibliographia serliana : Catalogue des éditions imprimées des livres du traité d'architecture de Sebastiano Serlio (1537-1681)*, Paris, Picard, 2007, n° 9 ; Mario Carpo, « Jean Martin, traducteur de Serlio, 1545-1547 », dans S. Deswartes-Rosa, *op. cit.*, 2004, p. 130-136 を参照。
- (39) *Quinto libro d'Architettura di Sabastiano Serlio Bolognese, Nel quale se tratta de diverse forme de Tempii sacri secondo il costume Christiano, et al modo Antico. A la serenissima Regina di Navarra. Traduiet en Francois par Jan Martin, Secetaire de Monseigneur le Reverendissime Cardinal de Lenoncourt*, Paris, Michel de Vascosan 1547. – In-Fol. 第五巻に関しては *Imprimeurs et libraires parisiens du XVI^e siècle*, Tome 2, Paris, 1969, n° 780bis ; Magali Vène, *op. cit.*, 2007, n° 12 ; notice par Anne-Marie Sankovitch, dans S. Deswartes-Rosa, *op. cit.*, 2004, p. 137-139 を参照。
- (40) *Architecture ou Art de bien bastir, de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit., 1547. *Imprimeurs et libraires parisiens*, Tome 3, n° 62 (notice rédigée par Ursula Baurmeister) を参照。
- (41) *L'Architecture et Art de bien bastir du Seigneur Leon Baptiste Albert, Gentilhomme Florentin, divisée en dix livres, Traduits de Latin en François, par deffunct Jan Martin, Parisien, nagueres Secetaire du Reverendissime Cardinal de Lenoncourt*, Paris, Jaques Kerver, 1553. – In-fol. Mario Carpo, « Les problèmes de la traduction du *De Re aedificatoria* d'Alberti (1553) », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 127-133 ; « La traduction française du *De re aedificatoria* (1553) : Alberti, Martin, Serlio et l'échec d'un classicisme vulgaire », dans Francesco Furlan, Pierre Laurens, Sylvain Matton (éd.), *Leon Battista Alberti. Congrès International. Paris, 10-15 avril 1995*, Paris, Vrin ; Toirino, Nino Aragno, 2000, p. 923-964

を参照。

- (42) *Hypnerotomachie, ou Discours du songe de Poliphile, deduisant comme Amour le combat a l'occasion de Polia. Soubz la fiction de quoy l'aucteur monstrant que toutes choses terrestres ne sont que vanité, traicte de plusieurs matieres profitables, & dignes de memoire. Nouvellement traduit de langage Italien en Francois*, A Paris, [Loys Cyraneus] pour Jacques Kerver, 1546. – In-fol. *Imprimeurs et libraires parisiens du XVI^e siècle*, t. IV, Paris, 1986, n° 160 ; Francesco Colonna, *Le Songe de Poliphile : Traduction de l' « Hypnerotomachia Poliphili » par Jean Martin* (Paris, Kerver, 1546) *Présentation, translittération, notes glossaires et index par Gilles Polizzi*, Paris, Imprimerie nationale, 1996.
- (43) マルタンに草稿を持ち込んだジャック・ゴオリが「マルト騎士団の修道士」（« *equus meltens* » *Hypnerotomachie, ou Discours du songe de Poliphile*, Paris, J. Kervzer, 1561, f. a1v）と呼ぶ草稿の謎の翻訳者に関して、エルザ・カメレルはアレティーノ L'Arétin の翻訳で知られるジャン・ドゥ・ヴォゼル Jean de Vauzelles である可能性を指摘している。Elsa Kammerer, *Jean de Vauzelles et le creuset lyonnais (1520-1550)*, Genève, Droz, 2013, p. 399-405.
- (44) 1549年のパリの入市式に関しては、一種の挿絵入り公式ガイドの復刻 I. D. McFarlane (éd.), *The Entry of Henri II into Paris 16 June 1549*, Binghamton-New York, 1982. また以下の研究 Lawrence Bryant, *The King and the City in the Parisian Royal Entry Ceremony : Politics, Ritual, and Art in the Renaissance*, Genève, 1986 ; V.-L. Saulnier, « Sebillot, Du Bellay, Ronsard : L'Entrée de Henri II à Paris et la révolution poétique de 1550 », dans *Les fêtes de la Renaissance*, Paris, 1956, p. 31-59 ; Richard Cooper, « Jean Martin et l'entrée de Henri II à Paris », dans *Jean Martin : Un traducteur...*, 1999, p. 85-111 を参照.
- (45) *L'Arcadie*, éd. cit. : « Monseigneur, environ le commencement de cest yver dernier, V. R. S. me commanda que je luy feisse veoir ma traduction francoyse de l'Arcadie Italienne de messire Jaques Sannazar gentil homme Napolitain. Ce que lors ne me fut possible, pour ne l'avoir encores mise au nect, dont j'estoye grandement desplaisant. Mais pour reparer ceste faulte, je la vous ay fait imprimer en beaux caracteres : et maintenant oze bien prendre la hardiesse de la vous dedier avec ma perpetuelle servitude » (f. A2).
- (46) Carlo Vecce, « L'Arcadie de Sannazar, selon Jean Martin », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 161-176.
- (47) M. Lowry, *op. cit.*, p. 150-158.
- (48) 本の体裁と文学の受容の変化については Henri-Jean Martin, *La Naissance du livre moderne (XVI^e-XVII^e siècle) : Mise en page et mise en texte du livre français*, Paris, Éditions du Cercle de la Librairie, 2000（特にアルド・マヌーツィオの八折版の影響に関しては）p. 182-183 を参照。1545年にヴァスコザンは『アゾロの談論』の他にもう一冊ジャック・ペルティエ・デュ・マンによるホラティウスの『詩論』のフランス語訳を同じ体裁で出版している。1541年に初版の出版されたこの翻訳の序文はフランス語の擁護と顕揚を鮮明に宣言している。*L'Art poetique d'Horace, traduit en Vers Francois par*

- Jacques Peletier du Mans, recongnu par l'auteur depuis la premiere impression. Moins & meilleur.* – Imprimé a Paris par Michel de Vascosan, au mois d'Aoust. Avec privilege de la Court, 1545, f. 3-6 ; Claude Longeon, *Premiers combats pour la langue française*, Paris, Librairie générale française, 1989, p. 94-100.
- (49) 『アルカディア』と『アーズロの談論』の原文と訳文の関係の比較分析に関しては T. Uetani, « « Fabrique et discours » de la traduction dans les années 1540 en France », dans *Traduction et critique, Colloque international pour commémorer le 500^{ème} anniversaire de la naissance d'Etienne Dolet (1509-1546)*, organisé par Yeonghoun Yi, Jookyoungh Sohn et Jaeryoung Cho, les 24-27 septembre 2009, Séoul, Université Koréa (Publications de l'Institut d'études de traduction et de rhétorique), 2009, p. 110-126 を参照。
- (50) *Les Azolains*, éd. cit. : « Qui m'estoit, a la verité, une charge presque insupportable, tant pour la gravité de la matiere, pleine pour la pluspart de philosophie morale, & sainte Theologie, que pour la diversité des rymes, en quoy me treuve peu exercité. Dont fault que franchement je confesse, si l'auctorité de ce commandement ne m'eust faict croistre le courage, que jamais n'en feusse venu a bout » (« A Monseigneur, Monseigneur le duc d'Orleans », f. 2).
- (51) C. Vecce, art. cit., p. 164-166.
- (52) Bnf, Ms. Fr. 12338 (Gallica : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8539705d>).
- (53) T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001, p. 144-154 ; p. 426-456.
- (54) Toshinori Uetani et Henri Zerner, « Jean Martin et Jean Goujon en 1545 : Le manuscrit de présentation du *Premier livre d'Architecture de Marc Vitruve Pollion* », *Revue de l'art*, n° 149 (2005), p. 27-32, surtout p. 31.
- (55) *La Theologie Naturele de Dom Raymon Sebon, docteur excellent entre les modernes, mise de Latin en François, suyvant le commandement de tresillustre & tresvertueuse dame, Madame Leonor, Royne douairiere de France*. A Paris, De l'Imprimerie de Vascosan, 1551. Jean Balsamo, « Jean Martin, Eléonore d'Autriche et la *Théologie naturelle* de Raymond Sebond », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 177-193 ; Mireille Habert, *Montaigne traducteur de la Théologie naturelle : Plaisantes et saintes imaginations*, Paris, Classiques Garnier, 2010, p. 39-43 ; p. 267-286 を参照。
- (56) *La Theologie Naturele de Dom Raymon Sebon*, éd. cit. : « puis que vous me faictes ce bien de m'entretenir à l'estude [...] » (f. *2).
- (57) Eugène Droz, « Notes sur Théodore de Bèze », *BHR*, XXIV (1962), p. 589-610 を参照 .
- (58) « Correcteur » に関しては A. Charon-Parent, *op. cit.*, p. 121-126 ; Anthony Grafton, *The Culture of Correction in Renaissance Europe*, London, The British Library, 2011 ; Rémi Jimenes, *Charlotte Guillard : Une femme imprimeur à la Renaissance*, Tours, Presses universitaires François-Rabelais de Tours ; Presses universitaires de Rennes, 2017, p. 72-80 を参照。
- (59) ロベール・エスティエンヌは 1557 年に出版した『フランス語文法』の緒言で「この文法書は我々の羅仏事典や仏羅事典を使ってラテン語からフランス語への翻訳に携

わっている者たちに最も役に立つだろう」と述べている。Robert Estienne, *Traicté de la grammaire Francoise*, [Genève], R. Estienne, 1557 (Genève, Slatkine, 1972), p. 3-4 ; Toshinori Uetani, « La naissance d'un métier : Traducteur. Jalons chronologiques », dans Christine Bénévent, Isabelle Diu, Chiara Lastraioli (éd.), *Gens du livre & gens de lettres à la Renaissance*, Turnhout, Brepols, 2014, p. 54 を参照。

- (60) 翻訳に必要な参考書類の工房からの貸与を明記している契約に関しては A. Charon-Parent, *op. cit.*, p. 115 を参照。
- (61) *Hypnerotomachie, ou Discours du songe de Poliphile*, éd. cit., 1546 : « Incontinent apres que j'eu mis en lumiere mon Arcadie de Sannazar, un mien amy qui avoit la copie de ce livre, me l'apporta pour me la communiquer : et apres plusieurs propoz me pria que pour amour de luy je voulusse prendre la charge de la revoir. Ce que je luy accorday, comme a celluy pour lequel je vouldroye faire beaucoup plus grand chose : et de fait me trouvant pour l'heure un petit de loysir, commenceay en sa presence a changer non seulement quelques orthographes qui ne nous sont plus usitees, mais d'avantage a transposer quelques motz qui retenoient encores de la fraze Italienne, tant corrompue, que veritablement je m'esbahy comment ce gentilhomme en avoit peu si bien venir a bout : et certainement cela me rendit si religieux en son endroit, que je n'ay jamais voulu amplifier ny diminuer aucune chose aux clauses qu'il avoit faictes, sinon par fois muer leur ordre, afin de les rendre plus faciles » (f. ã*3v).
- (62) リュース・ギレルムは匿名の翻訳が 16 世紀の前半に減少する傾向にあると指摘している。Luce Guillerme, *Sujet de l'écriture et traduction autour de 1540*, Paris, Aux Amateurs de livres, 1988, p. 400 ; T. Uetani, art. cit., 2014, p. 38.
- (63) ジャン・マルタンの翻訳は Gallica, Bayerisches Staatsbibliothek, Österreichisches Nationalbibliothek, Bibliothèques Virtuelles Humanistes, Architectura 等のデジタル・ライブラリーで読むことが出来る。書誌に関しては M. M. Fontaine, « Bibliographie », dans Jean Martin, *Un traducteur...*, 1999, p. 267-268 ; T. Uetani, « Jean Martin », dans Colette Nativel (éd.), *Centriae Latinae II : Cent une figures humanistes de la Renaissance aux Lumières. A la mémoire de Marie-Madeleine de La Garanderie*, Genève, Droz, 2006, p. 505-510 を参照、また USTC (Universal Short Title Catalogue) <https://www.ustc.ac.uk/search>, BP16 <http://bp16.bnf.fr/> や Gln 15-16 <http://www.ville-ge.ch/musinfo/bd/bge/gln/> 等のデータベースで確認、更新が可能である。
- (64) *L'Architecture et art de bien bastir du Seigneur Leon Baptiste Albert*, éd. cit. : « [...] outre le pur & vray langage François ordinaire, congny par ses traductions de l'Arcadie de Sannazar, des Azolains de Bembo, du Poliphile, de Vitruve, de la Theologie naturelle, & d'Orus Apollo, y trouverez vostre langue enrichie de mille mots, paravant cachés dedans les boutiques des seuls ouvriers [...] » (f. ã2).
- (65) Robert Aulotte, « D'Egypte en France par l'Italie : Horapollon au XVI^e siècle », dans *Mélanges Franco Simone*, Genève, Slatkine, 1980, t. I, p. 555-572. ミレイユ・ユシオンは ウィトルウィウスとホラポロンで ichneumon (エジプトマンゲース) という動物に同

- じ訳語 « Rat d'Indou ou Romadou » が使われていることから、マルタンの翻訳である可能性を示唆している。M. Huchon, art. cit. p. 140-141.
- (66) 前掲注 6 と後掲注 87 を参照。
- (67) *Oratio in funere Francisco Francorum Regi à professoribus Regiis facto, habita Lutetiae Nonis Maii, M. D. XLVII*, Lutetiae, Apud Michaellem Vascosanum, 1547 – *Oraison sur le trespas du Roy Francois, faite par Monsieur Galland, son lecteur en lettres Latines, & par luy prononcée en l'université de Paris, le VII jour de May M. D. XLVII*, Imprimée a Paris par Michel de Vascosan, 1547.
- (68) ジェリの作品の仏訳に関しては、M. M. Fontaine, 1988, art. cit., p. 118, n. 2 ; Jean Balsamo, Vito Castiglione, Minischetti, Giovanni Dotoli, *Les Traductions de l'italien en français au XVI^e siècle*, Fasano, Schena ; Paris, Hermann, 2009, p. 224-225.
- (69) Jean-Pierre Nicéron, *Mémoire pour servir à l'histoire des hommes illustres dans la république des lettres*, t. XLII, Paris, 1741 (réimpression, Genève, 1971), p. 330.
- (70) M. M. Fontaine, 1988, art. cit., p. 120, n. 3 ; « Conclusion », dans Jean Martin, *Un traducteur...*, 1999, p. 230-231.
- (71) 『狂えるオルランド』 *Roland furieux* の散文仏訳 (Lyon, Sulpice Sabon pour Jehan Thellusson, 1544) に関しては Henri Baudrier, *Bibliographie lyonnaise*, Paris, 1964 (réimpression de l'édition de Lyon, 1895-1921), t. I, p. 422-423 et t. IV, p. 314 ; Ruth Mortimer, *Harvard College Library Department of Printing and Graphic Arts. Catalogue of Books and Manuscripts, I, French 16th Century Books*, Cambridge (Mass.), 1964, n° 36 ; Alexandre Cioranescu, *L'Arioste en France des origines à la fin du XVIII^e siècle*, Paris, Editions des Presses modernes, 1939, t. I, p. 76-86 et t. II, p. 225-226 [à corriger le millésime « 1543 » en « 1544 » dans la description du n° 1 (t. II, p. 225) ; on lit bien « 1544 » au titre de l'exemplaire de la Médiathèque de Troyes, [x.3.310 ; ancienne cote : BL 4150] ; M. M. Fontaine, 1988, art. cit., p. 119-120, n. 3 ; Rosanna Gorris, « « Non è lontano a discoprirsi il porto » : Jean Martin, son œuvre et ses rapports avec la ville des Este », dans Jean Martin, *Un traducteur...*, 1999, p. 43-83 ; M. M. Fontaine, « Conclusion », *ibid.*, p. 228-232 ; R. Gorris, « Conclusion », dans *L'Arioste et le Tasse en France au XVI^e siècle* (colloque organisé par Rosanna Gorris), Paris, Presses de l'École Normale Supérieure, 2003 (*Cahers V.L. Saulnier*, n° 20), p. 261-266 ; T. Uetani, « Jean Martin traducteur du *Roland furieux* ? », dans Jean Dupèbe, Franco Giacone, Emmanuel Naya, Anne-Pascale Pouey-Mounou (éd.), *Esculape et Dionysos : Mélanges en l'honneur de Jean Céard*. Genève, Droz, 2008, p. 1089-1109 ; « Who was the First French Translator of *Orlando furioso* », Paper pronounced at the Annual Meeting of the Renaissance Society of America, Chicago, April 2008 (disponible sur HAL : <https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01585260>) ; Francesco Montorsi, *L'Apport des traductions de l'italien dans la dynamique du récit de chevalerie (1490-1550)*, Paris, Classiques Garnier, 2015, p. 208-238 を参照。
- (72) « Breve exposition de quelques passages du Premier livre des Odes de Pierre de Ronsard »

- (éd. P. Laumonier, t. II, p. 203-211 ; Pierre Laumonier, *Ronsard poète lyrique : Étude historique et littéraire*, Paris, Hachette, 1923, p. 66-67. マリー・マドレーヌ・フォンテーヌは「I.M.P.」がむしろジャン・モレル (Jean Morel) である可能性を示唆している。また、ラブレールの『第四の書』の1552年版 (Paris, Michel Fezandat) の巻末に附された語彙解説 (Briefve declaration d'aucunes dictiones plus Obscures contenues on quatriemes livre des Faicts et Dicts Heroïques de Pantagruel) では『ポリフィルの夢』の著者名が誤っておりマルタンが関わっている可能性は極めて低いと指摘している。M. M. Fontaine, « Conclusion », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 235-237.
- (73) ジャン・マルタンによるフランス語訳のウィトルウィウスの『建築論』の Terence Russon Wooldridge が電子化した本文とデータベースは次のアドレスでアクセス可能。http://homes.chass.utoronto.ca/~wulftric/vitruve/index.html
- (74) Abel Foullon, *Usaige et description de l'holometre*, Paris, Pierre Béquin, 1555 ; « [...] un autre : qui apres m'estre tant fié en luy, que luy communiquer la traduction Françoisse du Vitruve, & luy avoir fait part du labour que j'avoys pris pour sçavoir user en icelle des propres mots, desquels ordinairement usent les maçons, et autres ouvriers, chacun en son art et ouvrage, me fist soustraire par l'imprimeur qui lors m'avoit mis en besongne, les huit premiers livres dudit Vitruve, soubz faintise d'une entiere amitié : tellement que je fus frustré par l'un, de l'honneur : et par l'autre, du salaire que mon labour pouvoit meriter » (f. A2v). Cf. La Croix du Maine, *op. cit.*, p. 1.
- (75) 1511年にヴェネツィアでウィトルウィウスの『建築論』を「初めて理解可能な本文 *« ut iam legi et intelligi possit »*」と「図版と索引とともに *« cum figuris et tabula »*」出版した (Venezia, Joannes de Tridino, alias Tacuino, 1511) ジョヴァンニ・ジョコンド Fra Giovanni Giocondo が1500年代初頭にパリで行い、ピュデモも聴講したウィトルウィウスの講義に関しては特に Vladimir Juren, « Fra Giovanni Giocondo et le début des études vitruviennes en France », *Rinascimento*, II-XIV (1974), p. 101-115 et fig. ; Pierre Gros ; Pier Nicoila Pagliara (dir.), *Giovanni Giocondo : Umanista, architetto e antiquario*, Vicenza, Centro internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio, 2014 を参照。1544年にローマでウィトルウィウスの注解を出版したギヨーム・フィランドリエ Guillaume Philandrier に関しては Frédéric Lemerle, « Jean Martin et le vocabulaire d'architecture », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 113-126 ; *Les Annotations de Guillaume Philandrier sur le De architectura de Vitruve, Livres I à IV*, Paris, Picard, 2000 を参照。ギヨーム・フィランドリエは1525年にパリ大学教養学部に登録し (BnF, Ms. Lat. 9951, f. 131r° a)、マルタンと同時に教養学士を取得 (BnF, Ms. Lat. 9952, f. 34r° a ; T. Uetani, art. cit., dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 15 et n. 18)。
- (76) Vitruve, *op. cit.* : « mesme si je ne me feusse prevalu du labour de frere Jehan Joconde [...] et d'autres excellens personnages dignes de l'immortalité, jamais je ne feusse venu au bout de mon entreprise. Si est ce (a dire vray) qu'ilz ne m'y ont en tout et par tout assisté, ains à souventesfois convenu que je me soye fait la voye par le moyen de la raison, jointe à

l'usage du compas, & pratique de pourtraicture, dont j'ay presenté les choses aux ouvriers. teles que je les concevoye en fantasie afin d'en avoir leur jugement avec la propriéte des termes de leurs ars correspondans aux antiques, en quoy du premier coup ny sans grans fraiz ilz ne m'ont satisfait, [...]» (f. A 2v°).

- (77) *Ibid.* : « [...] mais si je n'eusse usé de tele industrie je perdoye & mon temps & ma peine, a raison de quoy pour ne me monstrier ingrat en leur endroit, je leur ay fait une declaration des noms propres & termes difficiles contenuz en cest Autheur, laquelle a esté mise au dernier du livre avec les discours de maistre Jehan Goujon sur les figures par luy nouvellement faistes » (f. A 2v°).
- (78) *Les Satyres de Perse, translatees de Latin, en rithme Francoyse. Moyen, ou trop. Avec privilege*, Paris, Chez Jacques Gazeau, 1544 (La Croix du Maine, *op. cit.*, 1584, p. 2 ; USTC, n° 38335 ; BP16_112202). 表題の発行年は1544年だが、ピエール・ゴテイエ Pierre Gauthier に与えられた免許状の日付1544年1月1日(a. s.)からグレゴリオ暦の1545年(n. s.)の復活祭前に発行されたことになる。ジャック・ガゾーはジャン・バルベの娘カトリーヌと1546年1月に結婚し、バルベと同じ場所で活動。この翻訳からフーロンはピエール・ゴテイエを通じてウイトルウィウスを出版したバルベやガゾーの知己であったことがわかる。Philippe Renouard, *Répertoire des imprimeurs parisiens, libraires, fondateurs de caractères et correcteurs d'imprimerie depuis l'introduction de l'Imprimerie à Paris (1470) jusqu'à la fin du seizième siècle avec un plan de Paris sous Henri II par O. Truschet et G. Hoyaut ; avertissement, tables des enseignes et adresses, liste chronologique par Jeanne Veyrin-Forrer et Brigitte Moreau*, Paris, M. J. Minard « Lettres Modernes », 1965, p. 166.
- (79) ロンクール枢機卿の他にマルタンはすでにオルレアン公シャルル(『アーズロの談論』)とマルグリット・ドゥ・ナヴァール(セルリオ)にも翻訳を献呈しているが、オルレアン公シャルルが1545年に病死した後、1547年にはフランソワ一世が逝去したため、宮廷内では父や伯母と対立関係にあったといわれるアンリ二世からの援助が期待できなかった可能性がある。
- (80) « L'épître dédicatoire à Charles, duc d'Orléans » dans *Les Azolains*, éd. cit. : « je ne puis rien de moy mesme, ayant tousjours necessite d'un Apollo qui m'incite et conduyse [...]» (f. 2v°). 翻訳に於いて訳者が原文を尊重し自らの主体性を消去しようとしているようにも読めるこの文章のありふれた言葉は、どこかヨハネによる福音書の一節を思い起こさせる。「*non possum ego a me ipso facere quicquam [...]*» (Secundum Iohanem, 5, 30).
- (81) アレクサンドリアの図書館(ムセイオン)とビュザンティオンのアリストファネスの古代文献学的发展についてはL. D. Reynolds et N. G. Wilson, *D'Homère à Érasme : La transmission des classiques grecs et latins*. Nouvelle édition revue et augmentée traduite par C. Bertrand et mise à jour par P. Petitmengin, Paris, Éditions du CNRS, 1988, p. 4-12を参照。
- (82) *Ibid.*, f. A2v-3v ; *Architecture ou Art de bien bastir de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit., f. 99v-

100. Cf. *Vitruvius per Jocundum solito castigatior factus cum figuris et tabula ut iam legi et intelligi possit*, Venezia, Joannes de Tridino, alias Tacuino, 1511, f. 68 ; Vitruve, *De l'architecture, Livre VII*, éd. et trad. Par Bernard Liou, Michel Zuinghedau et Marit-Thérèse Cam, Paris, Les Belles Lettres, 1995, p. 2-4 (Praef. 4-7).
- (83) *Architecture ou Art de bien bastir de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit. : « Moy donc, quel que je soye, O Cesar, en vous presentant ce mien œuvre d'Architecture, je ne tasche a supprimer les noms de ceulx dont je me suis aydé, pour m'attribuer leurs louenges : et ne veuil deprimer les inventions de personne pour exalter les miennes oultre le devoir, ains remercyé universelement toutes manieres d'escrivains, qui ont siecle apres autre, exercité leurs industries, pour prester de leur abondance a ceulx de la posterité, ayans desir d'escrire leurs conceptions : ce qu'ilz ont fait a moy, qui comme puiseur d'eau en leurs fontaines, et l'appliquant en mes usages, ay rendu ceste matiere plus fertile, & ma diction plus copieuse. » (f. 100v). Cf. *Vitruvius per Jocundum...*, 1511, f. 69 ; Vitruve, *De l'architecture, Livre VII*, éd. cit., 1995, p. 5 (Praef. 10).
- (84) Gilbert Gadoffre, *La Révolution culturelle dans la France des humanistes. Préface de Jean Céard*, Genève, Droz, 1997 を参照。
- (85) ウィトルウィウスの「緒言」の最後でマルタンは「配慮のある熱心な les plus curieux」読者に「もし面前で中傷する者があれば、優しく丁寧理由を説明し、すこし大人になって謙虚さを身に付けるよう論してくれることを」懇願している。 *Architecture ou Art de bien bastir de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit. : « si d'avanture aucun calumnieur en mesdisoit en leur presence, ilz taschent par douces et honnestes remonstrances de le renger a tele raison qu'il en apprenne a devenir plus sage & plus modeste » (f. A2v°).
- (86) *Les Amadis en France au XVI^e siècle*, Paris, Presses de l'École Normale Supérieure, 2000 (*Cahers V.L. Saulnier*, n° 17); Hugues Vaganay, *Amadis en français : Essai de bibliographie*, Florence, 1906 (Reprint : Genève, Slatkine, 1970) を参照。
- (87) Michel Simonin, « La disgrâce d'Amadis », *Studi francesi*, XXXVIII^e année, n° 1 (janvier-avril 1984), p. 1-35 (*L'encre et la lumière*, Genève, Droz, 2004, p. 189-234) を参照。
- (88) 16世紀のプルタルコスの翻訳に関しては前掲注21と Robert Aulotte, *Amyot et Plutarque : la tradition des moralia au XVI^e siècle*, Genève, Droz, 1965 を参照。
- (89) アニー・シャロン＝パランは彼女の調査した当時の公正証書の中でラテン語やスペイン語からフランス語への翻訳に関する契約が1550年から1560年の間に集中している事実に注目している (A. Charon-Parent, *op. cit.*, p. 110)。アントワープの出版者クリストフ・プランタンの工房には翻訳に支払われた費用の記載された帳簿が保存されている。Leon Voet, *The Golden Compasses : A History and Evaluation of the Printing and Publishing Activities of the Officina Plantiniana*, Amsterdam, Vangendt & Co., 1972, p. 289, n. 2.
- (90) ベルフォレに関しては Michel Simonin, *Vivre de sa plume au XVI^e siècle ou la carrière de François de Belleforest*, Genève, Droz, 1992 ; シャピユイに関しては Jean-Marc Dechaud,

- Bibliographie critique des ouvrages et traductions de Gabriel Chappuys. Préface de Jean Balsamo*, Genève, Droz, 2014 を参照。アラビア語のような特殊な言語に関しては外交の代行も兼ねた通辞の家系が存在するが、フランス語での出版に直接関与する職業翻訳家とは地位、性格が異なる。Marie-Christine Gomez-Gérard, « La figure de l'interprète dans quelques récits de voyage français à la Renaissance », dans J. Céard et J.-Cl. Margolin (éd.), *Voyager à la Renaissance*, 1987, p. 319-335 ; T. Uetani, art. cit., 2014, p. 38 et 57-59.
- (91) *Vitruvius per Jocundum*, éd. cit., f. 2.
- (92) BnF, Ms. Fr. 12338, f. 6r.
- (93) Robert Estienne, *Dictionarium latinogallicum*, Paris, R. Estienne, 1544 : « Epistylum, Ung chapiteau d'ung pilier et colonne » (p. 245).
- (94) *Architecture ou Art de bien bastir de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit., f. 3r.
- (95) *Ibid.*, « Declaration des noms propres et motz difficiles contenuz en Vitruve » : « Architrave est comme un sommier de pierre, ou de charpenterie qui se met au dessus d'un estage, pour en continuer des autres en montant » (f. A2v); « Epistyles sont Architraves que j'ay desja specifiez en la lettre A » (B1v). Cf. T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001, p. 144-154.
- (96) « Architraves » という言葉自体は 1520 年代後半から建築に関する契約書等に使われていることが確認されている。Jean Plattard, « A propos du maître Pihout et ses hétérocrites », *Revue du XVI^e siècle*, V (1919), p. 287-289. また、おそらく 1536 年頃に出版されたウィトルウィウスの要約版ともいえるサグレドの建築論の訳者不明のフランス語訳 (*Raison d'architecture antique, extraicte de Victruve, & aultres anciens Architecteurs, nouvellement traduit Despaignol en Francoys : a lutilite de ceulx qui se delectent en edifices*, Paris, Simon de Colines, s.d. ; Philippe Renouard, *Bibliographie des éditions de Simon de Colines 1520-1546*, Paris, Ém. Paul, L. Huard et Guillemin, 1894, p. 316-318, p. 362, et p. 422) でも図版入りで説明がある。またマルタン自身も 1546 年に出版された『ポリフィロ』で既に他の建築用語とともに使っている。F. Lemerle, art. cit., 1999, p. 120-123 を参照。
- (97) Robert Estienne, *Dictionnaire Francoislatin*, 1549 (réimpression : Genève, Slatkine, 1972) : « Architrave est comme ung sommier de pierre, ou de charpenterie, qui se met au dessus d'ung estage, pour en continuer des autres en montant, Epistylum » (p. 674 a); *Dictionarium latinogallicum*, 1552 : « Epistylum, Varro. Vn chapiteau d'un pilier & colonne, Architrave » (p. 470). Terence Russon Wooldridge, « Vitruve latin et français dans les dictionnaires de Robert Estienne », dans Charles Brucker (éd.), *Traduction et adaptation en France à la fin du Moyen Age et à la Renaissance. Actes du Colloque* (Université de Nancy II, 23-25 mars 1995), Paris, Champion, 1997, p. 261-280 を参照。このような当時の研究や翻訳の進展をエステイエヌの辞書が積極的に取り入れているのはこの例だけに限らない。古代貨幣についての歴史考古学的考察 *De Asse* (Paris, Badius, 1517) を著し、1522 年にそのフランス語版要約を (*Summaire et epitome du livre De Asse, éditoin critique par Marie-Madeleine de La Garanderie et Luigi-Alberto Sanchi*, Paris, Les Belles Lettres 2008)

- 出版したギヨーム・ビュデの特に法律用語や狩猟用語に関する羅仏語彙の注釈はロベール・エステイエンスの辞書では「B」の略号で示され多数取り入れられている。Terence Russon Wooldridge, *Les débuts de la lexicographie française : Estienne, Nicot et le Thresor de la langue françoise [1606]*, Toronto, University of Toronto Press, 1977, p. 72-74.
- (98) Pierre de Ronsard, « Abrégé de l'Art poétique français », dans Sébillet, Aneau, Peletier, Fouquelin, Ronsard, *Traité de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, éd. par Francis Goyet, Paris, Librairie générale française, 1990, p. 470-471.
- (99) Xénophon, *La Cyropédie [...] Traduite de Graec en langue Françoise, par Jaques de Vintemille, Rhodien*, Paris, pour Vincent Sertenas, 1547 (Catalog Bruce McKittrick, n° 33 (1998), n° 54); [Pierre Dorland], *La Theologie naturelle de Dom Raymon Sebon*, éd. cit., Paris, Vascosan, 1551 (*Catalogue de vente Luzarche*, 1868, p. 33, n° 217; *Supplément à Brunet*, t. II, col. 624; *Catalogue de vente (Bibliothèque de Monsieur Ch. P**)*, Le Plessis-Bouchard, le 14 septembre 2018, n° 23); Michel Simonin, « Autour de Jean Martin : Denis Sauvage, Jacques de Vintimille et Théodore de Bèze (documents inédits) », dans *Jean Martin, Un traducteur...*, 1999, p. 38-39.
- (100) *Architecture ou Art de bien bastir, de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit., 1547 : « Architecture est une science qui doit estre ornée de plusieurs disciplines, et diverses eruditions : par le jugement de ceste la sont examinez les ouvrages qui se font par tous Artisans, aussi elle provient de fabrique, et discours, ou communication que les ouvriers ont aucunesfois ensemble » (f. 1v); *Vitruvius per Jocundum...*, éd. cit. : « Architectura est scientia pluribus disciplinis, et variis eruditionibus ornata, cuius iudicio probantur omnia quae : ab ceteris artibus perficiuntur opera. Ea nascitur ex fabrica, et ratiocinatione » (f. 1). Cf. Vitruve, *De l'architecture, Livre I*, édition et traduction par Philippe Fleury, Paris, Les Belles Lettres, 1990, p. 4 (I, 1).
- (101) *Les dix livres d'Architecture de Vitruve, corrigez et traduits nouvellement en François, avec des Notes et des Figures.* - Paris, Chez Jean Baptiste Coignard, 1673 (Réimpression avec la préface d'Antoine Picon, Paris, Bibliothèque de l'Image, 1995), p. 2.
- (102) Vitruve, *De l'architecture, Livre I*, éd. cit. : « La ratiocinatio est en fait pour Vitruve une argumentation, un discours sur quelque chose qui a déjà été réalisé. [...] La traduction proposée par J. Martin au XVI^e siècle (« discours ») est nettement la meilleure ! » (Ph. Fleury, p. 68). Cf. *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum ex Ambrosii Calepini volumine depromptum*, éd. cit. : « Fabrica, ae. Lus. Edificio. Iap. Conriũ, zõsacu. » (f. Mm2v).
- (103) *L'Architecture et art de bien bastir du Seigneur Leon Baptiste Albert*, éd. cit. : « il [Vitruve] à traicté cest art en une façon de parler qui n'est guere bien labourée, car il parloit affin d'estre estimé Grec entre les Latins, et comme voulant que les Grecz devinassent qu'il avoit escrit en Latin, en quoy faisant il à gagné la reputation de n'estre bon Grec, ny bon Latin, telement qu'autant vouldroit qu'il ne nous eust communiqué sa doctrine, puis qu'ainsi est qu'on ne le peult entendre. » (f. 100v); Geofroy Tory, *Champ fleury*, Paris, 1529 : « Je ne lairray a escrire

- en Francois comme homme francois, les avertissant que Vitruve fut jadis reprins et moque, pour ce que luy n'estant Grec de nativite, escrivoit en vocables grecs, comme l'on peut encores veoir en la plusgrande partie des dictiones et vocables des utiles et autres choses d'architecture desquels en son livre a faict mention » (f. Iv).
- (104) *Architecture ou Art de bien bastir, de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit., f. A 2v°.
- (105) *Ibid.*, f. 66 ; *Vitruvius per Jocundum...*, éd. cit., f. 44 ; T. Uetani, *Étude prosopographique*, 2001, p. 187-191.
- (106) A. Chastel et R. Klein, *op. cit.*, 1995 (前掲注 7), p. 44-49 ; Robert Klein, « Les humanistes et la science », *Bulletin de l'Institut de philosophie*, XIV, 1965 (repris dans *La forme et l'intelligible : Écrits sur la Renaissance et l'art moderne*. Articles et essais réunis et présentés par André Chastel, Paris, Gallimard, 1970, p. 327-338 ; Jean Céard, « L'Humanisme en France : Etat de la question et propositions », *Studi francesi*, 153, LI-iii (2007), p. 516-525 を参照。
- (107) *Ambrosii Calepini Bergomatis Lexicon* [...], Lugduni : Apud Seb. Gryphium, 1540 : « August. lib. 4. Ciuitat. Virtus a ueteribus difinita est, ars bene recteque uiuendi. [...] Virtutem antiqui deam fecerunt quam Augustinus non esse deam, sed donum dei asserit. Lucisius de uirtute [...] » (col. 2199-2200).
- (108) *Architecture ou Art de bien bastir de Marc Vitruve Pollion*, éd. cit., « Mais saint Augustin en son quatrieme livre de la cité de Dieu, tesmoigne que les antiques l'ont deffinie Art de bien & heureusement vivre, & de faict l'adoroient pour une déesse, toutesfois icelluy saint Augustin escrit que ce n'est fors un don de Dieu, & de ce le fault croire par dessus tous les autres. » (« Declaration des noms propres et motz difficiles contenuz en Vitruve », f. D1v).
- (109) 注釈から個人的な述懐へのエクリチュールの移行に関しては Jean Céard, « Les transformations du genre du commentaire », dans *L'Automne de la Renaissance*, Paris, Vrin, 1981, p. 101-115 を参照。
- (110) 十六世紀、特にモンテーニュにおける聖アウグスティヌスの『神の国』の受容に関しては Takeshi Kubota, *Montaigne lecteur de la Cité de Dieu d'Augustin*, Paris, Honoré Champion, 2019 を参照。
- (111) E. Droz, art. cit., p. 600 et p. 603-610 (前掲注 57) を参照。
- (112) Cicéron, *Les Paradoxes des Stoïciens*, texte établi et traduit par Jean Molager, Paris, Les Belles Lettres, 1971, p. 100-101.
- (113) *Les Azolains*, éd. cit. : « le chemin de bien et heureusement vivre » (f. 4v) ; cf. « il sentiero del buon vivere » (*Gli Asolani*, éd. Dilemmi, 1991, p. 214) ; *L'Architecture et art de bien bastir du Seigneur Leon Baptiste Albert*, éd. cit. : « Noz predecesseurs nous ont laissé plusieurs et diverses sciences par eulx acquises avec merueilleux exercice d'esprit, conjoint a labeur vigilant et curieux oultre mesure, dont toutes les fins tendent a nous faire bien et heureusement vivre » (f. 1) ; Leon Battista Alberti, *L'Arhittettura [De re aedificatoria]*. Testo latino e traduzione a cura di Giovanni Orlandi, introduzione e note di Paolo Portoghesi,

- Milano Il Polifilo, 1966 : « Multas et varias artes, quae ad vitam bene beateque agendam faciunt, summa industria et diligentia conquisita nobis maiores nostri tradidere » (t. I, p. [7]).
- (114) 前掲注 55 を参照。
- (115) E. Pasquier, *Les Recherches de la France*, édition critique sous la direction de Marie-Madeleine Fragonard et François Roudaut, Paris, Champion, 1996 : « une pépinière, sur laquelle furent depuis entez plusieurs autres grands Poètes sous le regne de Henry deuxième » (p. 1411).
- (116) 高田勇訳。高田勇、前掲論文（注 4）, p. 17-18 ; Pierre de Ronsard, *Les Quatre premiers livre des Odes*, « A Jan Martin, Ode XIII » (éd. Laumonier, t. I, 1973, p. 131-135) : « [...] L'œuvre est de l'inventeur : | Et celui qui apprend | Est tenu pour menteur | Si grace ne lui rend : | La plume bien aprise | Dresse son vol aux cieus. | Et sa belle entreprise | Ne peut ceder aux lieux. » (éd. cit., p. 135).
- (117) *L'Architecture et Art de bien bastir du Seigneur Leon Baptiste Albert*, éd. cit., f. â2v-3v ; éd. Laumonier, t. V, 1968, p. 252-258.
- (118) François, Grudé, sieur de La Croix du Maine, éd. cit., 1584, p. 242-243 (http://bibfr.bvh.univ-tours.fr/bibfr/notice/lcdm-not_1200 ; *Bibliothèques françaises*, nouvelle édition revue, corrigée et augmentée d'un Discours sur le Progrès des Lettres en France, et des Remarques Historiques, Critiques et Littéraires de M. de La Monnoye et de M. le Président Bouhier, de M. Falconet, par M. Rigoley de Juvigny, Paris, Saillant & Nyon et Michel Lambert, 1772, t. I, p. 538-540) ; Antoine Du Verdier, *La Bibliothèque d'Antoine Du Verdier*, éd. cit., 1585, p. 719-722 (*Bibliothèques françaises*, éd. cit., 1773, t. 4, p. 460-463) ; 前掲注 8 を参照。
- (119) « Guillaume Colletet, *Vie de Jean Martin* », éd. par T. Uetani, dans *Jean Martin, un traducteur...*, p. 257-266 : « un des hardis et premiers athletes des belles lettres qui prirent le soin de nous donner les anciens et modernes auteurs étrangers en notre langue vulgaire » (p. 260). フランス近世における「文学史」の成立とギョーム・コルテに関しては Emmanuelle Morgat-Longuet, *Clio au Parnasse : Naissance de l'« histoire littéraire » française aux XVI^e et XVII^e siècles*, Paris, Champion, 2006 を参照。

Devenir traducteur : Le cas de Jean Martin

Au seuil du XVI^e siècle, le traducteur n'est nullement une profession ; il le devient au cours des décennies. L'étude d'un traducteur français de la première moitié du XVI^e siècle suivra, de près ou de loin, cette évolution. Elle n'illustrera peut-être pas le génie d'un écrivain ni n'analysera la pensée originale d'une œuvre, mais tâchera de reconstituer les conditions de travail d'un humaniste ordinaire. Elle essaiera, chemin faisant, de découvrir quelques aspects d'une époque vertigineuse qui a connu, un siècle après l'invention de la typographie, l'éclatement et la propagation des conflits religieux et l'élaboration d'un classicisme dans les arts, ainsi que la promotion de la langue et de la littérature vernaculaires.

Parmi les innombrables « Jean Martin », celui qui est connu pour ses traductions d'œuvres italiennes et latines ou de traités d'architecture, ainsi que pour sa révision du *Songe de Poliphile* fut parisien. Rares sont les archives et les témoignages qui nous renseignent sur sa vie, mais quelques éléments concordants nous permettent aujourd'hui d'en distinguer en pointillé trois phases distinctes : naissance et formation à Paris (ca. 1507-1528), période de voyages au service d'ambassadeurs (1528-1541) et, enfin, décennie d'activités littéraires dans le quartier latin de la capitale (1542- ca. 1553).

Immédiatement après la publication en avril 1544 de sa première œuvre de traduction l'*Arcadie* de Iacopo Sannazaro, Jean Martin, pressé par des commandes successives, publie coup sur coup plusieurs traductions en français : les *Azolains* de Pietro Bembo et les deux premiers livres d'architecture de Sébastien Serlio en 1545, le *Songe de Poliphile* en 1546, l'*Oraison funèbre sur le trespas du Roy François* de Pierre Galland, le *Cinquiesme livre* de Serlio et l'*Architecture, ou Art de bien bastir* de Vitruve en 1547. Dès 1548, il est occupé par la préparation des entrées d'Henri II et de Catherine de Médicis qui ont lieu en juin 1549. S'il publie en 1551 la *Theologie naturelle de Raymond Sebond* (de Pierre Dorlandus), commandée par

Eléonor d'Autriche dès l'été 1547, la mort l'empêche d'achever la traduction du *De re aedificatoria* d'Alberti, qui sera terminée et publiée par Denis Sauvage chez Jacques Kerver en 1553. La cadence est soutenue durant une dizaine d'années et ces activités littéraires et éditoriales accaparent le traducteur.

En 1544 et 1545, ses deux premières traductions sont imprimées par Michel de Vascosan pour lui-même et Gilles Corrozet dans un format in-octavo avec le caractère italique, tout comme leurs originaux italiens publiés par Alde Manuce à Venise. Après avoir publié l'*Hypnerotomachia Poliphili* en 1499, ce dernier inaugure la collection de classiques de « poche » en imprimant en 1501 les auteurs latins tels qu'Horace, Virgile, Juvénal, Perse ou Martial dans un format in-octavo avec le caractère italique élégamment dessiné par Francesco Griffio. Il transpose parallèlement cette présentation pour les textes vernaculaires en publiant les *Cose volgare* de Pétrarque, puis les *Terze rime* de Dante en 1502 avec la collaboration de Pietro Bembo qui en établit les textes avec une méthode philologique jusqu'alors réservée aux classiques gréco-latins. C'est cet imprimeur humaniste qui publie en 1505 *Gli Asolani* et en 1515 l'*Arcadia* dans une version remaniée par Bembo avec l'accord de l'auteur. En imprimant les versions françaises de ces deux textes dans une présentation qui rappelle immanquablement celle d'Alde Manuce, Michel de Vascosan, spécialisé jusqu'alors dans les ouvrages scolaires en latin, lance sa collection de textes français destinée à défendre et illustrer la langue française. En 1545, il imprime aussi dans le même format l'*Art poetique* d'Horace, traduit par Jacques Peletier du Mans, dont la préface préfigure le manifeste de Joachim Du Bellay en 1549.

Or, ces deux textes français, dont les originaux sont publiés par le même imprimeur à Venise, traduits par le même traducteur et imprimés à Paris par le même imprimeur dans la même présentation, laissent au lecteur une impression disparate. Lorsqu'on étudie les rapports entre l'original et la traduction, l'*Arcadie* et les *Azolains* présentent des caractéristiques sensiblement différentes que ce soit pour la *ratio* des nombres de mots, la distance syntaxique, ou encore le taux d'équivalents directs. Par rapport à l'*Arcadie*, la traduction des *Azolains* semble être beaucoup moins fidèle. D'où

vient cette disparité ? Que s'est-il passé entre 1544 et 1545 ?

Jean Martin rappelle, dans sa dédicace de l'*Arcadie* adressée à Robert de Lenoncourt, qu'il n'a pas pu présenter sa traduction à ce dernier « environ le commencement de cest hiver dernier », parce qu'elle n'était pas encore « mise au nect ». C'est pour réparer cette faute qu'il l'a fait imprimer « en beaux caracteres ». La traduction était donc presque achevée au début de l'hiver 1543-1544 avant d'être imprimée en avril 1544, mais on ne sait pas quand il avait commencé à traduire. Il est probable que le traducteur bénéficiait d'un délai suffisamment long pour parfaire son travail ; l'« Exposition de plusieurs motz... » ajoutée en fin du volume témoigne en effet de sa connaissance intime de l'auteur et du milieu et de ses interprétations personnelles de l'œuvre. Quant aux *Azolains*, on sait, d'après l'épître dédicatoire adressée à Charles, duc d'Orléans, qu'il y avait moins de dix mois entre la commande et la publication. On comprend alors pourquoi Martin y présente une *excusatio* : la traduction des *Azolains* est pour lui « une charge presque insupportable. » C'est pour cette raison qu'il « confesse, si l'auctorité de ce commandement ne [l]'eust faict croistre le courage, que jamais n'en feusse venu a bout. »

Dans la même dédicace, Jean Martin cite la préface du livre VII du *De architectura* à propos d'Aristophane de Byzance. Pourquoi y emprunte-t-il sur plus de deux pages ce passage qui développe la condamnation du plagiat et l'éloge de l'écriture originale ? Pour un simple lecteur de Bembo, son intention reste difficile à deviner. En fait, cette première traduction française du *De architectura* sera accusée de plagiat dès 1555 par un contemporain. Dans son *Usaige et description de l'holometre*, Abel Foulon critique l'imprimeur et le traducteur de Vitruve, en prétendant s'être fait lésé de son honneur et de ses rétributions pour sa traduction des huit premiers livres de Vitruve. La revendication argumentée concernerait la traduction « des propres mots, desquels ordinairement usent les maçons, et autres ouvriers ». Or, Martin lui-même déclare, dans l'avertissement au lecteur de sa traduction, la même méthode de travail à propos de « la propriété des termes de leurs ars [des ouvriers] ». Mais ce qui retient davantage notre attention est qu'il y exprime aussi sa reconnaissance envers ses collaborateurs anonymes : « d'autres

excellens personnages dignes de l'immortalité ».

L'entreprise de traduction de Vitruve était déjà commencée au moins deux ans avant la publication et très probablement vers 1544. En rédigeant cette apologie au début des *Azolains*, Martin ne pensait-il pas au travail en cours de Vitruve mené avec plusieurs collaborateurs ? Et n'essayait-il pas de se justifier contre d'éventuelles contestations futures ? Dans le même texte, il remarque aussi que la traduction des *Azolains* « requeroit un *conducteur* plus industriel » que lui. Enfin ces lignes témoignent-elles d'une réflexion approfondie que Jean Martin menait alors sur l'organisation du travail collectif, le sens et la nature de l'acte de traduire et son statut de « traducteur - *conducteur* ».

(CNRS – Centre d'études supérieures de la Renaissance, Tours)

Toshinori UETANI

